経済学文献を語る
～私と経済資料協議会の歩み～

1981年6月13，14日
杉本俊朗先生自宅書斎にて

語り手
杉本俊朗
細谷新治

聞き手
細川元雄
（京都大学経済学部）
渋田義行
（龍谷大学社会科学研究所）
宮地見記夫
（一橋大学経済研究所）

細川　今日から明日の午前中にかけて，杉本，細谷両先生から「経済学文献を語る」と題しまして，今日までの両先生のご研鑽の一端をご披露下されば幸いと思っております。本年は経済資料協議会の30周年に，そして「経済学文献季報」第100号の発刊の年にも当ります。本誌はすでに10年前（第5号）の20周年記念に経済資料協議会史と両先生もご参加されました「20年を顧みて」の座談会を掲載しております。今回30周年記念号として趣をかえ，協議会の歩みに始終ご指導，ご貢献されました杉本，細谷両先生の個人史を語っていただくようにお願いいたしました。

杉本俊朗先生は，マルクス経済学者として高い評価を受けておられるとともに書誌学にもご造詣深く，協議会発足当初から主導的役割を果たしてこられました。協議会が1968年新組織となるや初代会長に就任され，そのご10年間会の運営にご努力下されました。

細谷新治先生は，戦後一橋大学経済研究所にご勤務以来，社会科学分野における書誌学者としてご研鑽をつまれ，日本経済統計文献センター，社会科学古典資料センターの教授としてご活躍になりました。細谷先生も協議会発足時より主導的役割を果たしてこられました。

ここで両先生を中心として語っていただくことは，今日の協議会の現状，とくに新しい世代の育成という課題に直面しているとき，とくに経済学分野での書誌学者とし

ての両先生の足跡をたどることは時宜にかなったことだと思われます。どうか両先生には協議会の会員個人に，そして書誌学を志す人々に語りかけて下さるようお願いいたします。

（本座談会は次のように構成された。

第１部　杉本俊朗先生

１．学生時代　２．東洋経済新報社から世界経済調査会時代　３．東京大学・東海大学時代　４．横浜国立大学時代

第２部　細谷新治先生

１．東京商科大学入学まで　２．東京商科大学学生時代　３．法政大学商業学校教諭時代　４．一橋大学時代

第３部　経済資料協議会のこと

第４部　経済書誌索引の展望　）

第１部　杉本俊朗先生

１　学　生　時　代

東大入学まで

細川　早速，最初に杉本先生の部に入らせていただきます。細谷先生には是非聞き手側に加わっていただき，進行させていただきます。

杉本　まず最初に大学生になるとき，なぜ経済学部を選んだかということから始めましょう。それには私が育った時代背景の影響があります。大正15年春に武蔵高校尋常科（中学に相当）に入学したので，中学から高校は昭和一ケタの時代ですから，社会経済情勢が不安定な激動時代で，前半は昭和２年に金融パニックが起っている，山東出兵などもあり，また三・一五事件，四・一六事件などがあった。こういう事件はその頃の中学生の眼にどういうことかわからなかったですが，経済ということが基本になっていることぐらいは感じとるようになり，経済のことを勉強する必要がある，と中学の３～４年には考えるようになったらしい。私の父は鉄道省の官吏でしたが，大正14年，私が小学生のとき退職し，もうその頃は南武鉄道という私鉄に勤めておりましたが，父がリベラルだったので，読書のことや将来の進路については本人まかせで，別に喧しいことを言われなかったから，自主的に自分の進む道を選択できたわけですが，やはりその当時の社会経済情勢に影響されました。ところで武蔵高校尋常科の３～４年生頃の私は熱心な映画ファンでした。サイレントからトーキーへの移行期でしたが，封切りの外国映画はほとんどみました。映画雑誌は『キネマ旬報』『映画往来』，『映画評論』など毎号買って読んでいた。そのうちだんだんヨーロッパの前衛

映画から新興芸術運動，とくにドイツのワイマール時代の造型芸術に興味をもち，板垣鷹穂さんの本を全部買って読んだりしました。それからかなりドイツの Bauhaus の運動，建築家 Walter Gropius の仕事に関心を寄せ，尋常科から高等科にかけて建築史や建築評論をやるのも面白いなあと思いましたが，本格的に建築をやるとなると高等科は理科へ進まなければならない。私は理科の科目は得意でなかったので，結局高等科は文科を選んだわけです。それでもはじめは文学部で美術史をやろうかとも思った。たまたま高等科1年の日本史の原田亨一先生が建築や仏像の好きな方で，講義は古代史，とくに法隆寺中心で法隆寺再建論とか，インドの影響とか。レポートの宿題が出て，大橋図書館へ通って関野貞，天沼俊一先生などの著書を材料に法隆寺のことを書いたのですが出来がよいという評価で校友会雑誌に載ることになったけれど，先生がその原稿をなくされてしまい，結局載らずじまい，どんなことを書いたか忘れてしまった。50年前のことですが，当時の自分の書いたものを一寸見たい気もします。そういう勉強をつづけて文学部の美学美術史科へ進んでも，当時の不況下では食えないわけです。法学部にいくことについては，父も明治40年に東大の法科大学を出て，官吏になったのですが，自分は官途について一生をあやまったと日常言っていたので，私も法学部のことは全然考えられなかった。結局残るところは経済学部しかなく，経済学部にいき，会社員になるほかないと思っていた。しかし建築史への関心は高校から大学へかけてつづき，当時大阪から東京へ移って来た『新建築』を毎号読んでいたし，紀伊国屋で "Die Form" や "Das Neue Frankfurt" を買ったりした。近頃はまた何十年振りかで建築史の本に親しんだりしております。

前に申したように，尋常科時代に経済が社会の基本らしいとおぼろげに感じていたのですが，はじめて読んだ経済学の書物はなにかとなると，はっきりした記憶はありませんが，河上肇先生の『近世経済思想史論』か『経済学大綱』だったと思います。前の方は父が持っておりました。これは信州木崎湖の夏季大学での講義などがもとになっていますが，父はこれに参加したので買ったのでしょう。『大綱』の方は円本ですから当時30銭ぐらいでごろごろしていました。『貧乏物語』も家にありました。父の学生時代の教科書もありましたが，そのなかに金井延や津村秀松の著書がありました。鉄道省在職中は地方の鉄道局で庶務課長を歴任し，当時は庶務課長は教習所長を兼任する制度になっていて，自分も教壇に立ち，経済学を担当していたようで，河上肇，福田徳三，河津暹，山崎覚次郎の諸先生の著書などをもっていました。退職後も

昭和に入って立教大学非常勤講師として交通政策を講じたり，晩年には昭和鉄道学校へ出講したりしていた関係上，ある程度経済学の書物が手近にありましたし，大正時代の新思想を代表する吉野作造，大山郁夫とか，当時流行した中沢臨川，野村隈畔などいまでは忘れられた哲学者の本もありました。それで私も高等科になると，父の蔵書を手当り次第のぞいて見たものでした。

そんな家庭内の条件もあって経済学部を目指すことになったわけですが，小学校からは東京育ちですから大学は当然東大ということになる。東大の競争率は法経で2.2倍くらいだったと思いますが，当時の入試科目は欧文和訳だけという呑気な時代です。私は文乙だったからドイツ語だけを受験準備しておけばよい。だけど入ってから官立から来る連中に伍して行くために，受験勉強を兼ねてドイツ語で経済学の入門をしておこうと発心し，大正以来普及していた Sammlung Göschen に入っていた Fuchs の "Volkswirtschaftslehre" を手はじめに読みました。

細谷　フックスは東京商大の左右田喜一郎さんの先生ですね。

杉本　そう。あれは Göschen の非常に古い，小さな本ですが，わが国では普及したようです。坂西由蔵さんの訳がありました。それから東大には Emil Lederer が招れましたが，その頃はもう帰国していた。彼には有沢広己と大森義太郎とが訳した『理論経済学概説』という本があり，その原本の新版 "Aufriß der ökonomischen Theorie" が1931年にでました。これは当時10円ぐらいした高い本でしたが，三越の洋書部で買いました。まだもっていますが，Mai 1933 と書き入れてある。これを一所懸命読んで Zurechnung は「帰属計算」と訳すんだと知ったわけです。ほかに Bücher の "Die Entstehung der Volkswirtschaft" の一部も読んだ。

細川　試験にどういう経済学のドイツ語文が出題されましたか。

杉本　いや全然。それどころかこの昭和9年度になって，いきなり試験科目がふえて，その頃試験科目は入試の半月前ほどに発表されるのです。過去何年も語学——欧文和訳——しか課されなかったのが，急に方針が変わり，法学部は語学に作文が加わり経済学部は歴史がプラスされることになった。3月3日に発表され，15日施行，受験生は大慌てで12日間に日本史，東洋史，西洋史をにわか勉強しました。ドイツ語の問題はどんなものが出題されたか忘れましたが，経済学の文章はなかった。日本史は憶えています。「足利時代の日本商人の対外発展云々」というものでした。

それで高校時代の文献探索ということになるんですが，僕は歴史が好きだったので，日本史，東洋史の文献を調べるために，ルーズ・リーフを大量に買ってきて，一点ずつ書きました。これは大学時代までつづけましたが，転々と持ちまわって大体残っている。20センチ位あります。論文も入っている。書誌事項は不完全ですが，日本経済大典などは各巻の内容までとってあるのは，われながらおどろいた。この間探したら

でてきましたが，これですよ。

細谷　これは先生の最初のビブリオですね。

杉本　まあそうですね。今みたいには日本書籍総目録がないので，出版社の目録を集めました。それは全く自分の興味にまかせて，その頃ですからツールを知らないわけで，カードを使わず，目次まで記入するつもりでルーズリーフ・ノートにしたらしい。当時だって歴史学の参考図書がありました。大塚史学会の日本史のカレント・ビブが論文要目という形であったし，『史学雑誌』に載っていたビブも見たような記憶もあります。また本庄栄治郎さんの『日本経済史文献』やそのつづきの『経済史研究』の特集号の「経済史年鑑」――単行本になる前，こんなものを利用したのでしょう。

歴史文献を調べたりするようになったのは，やはり唯物史観に接したからでしょう。1年の頃に自然科学の授業時間に岩波文庫の三木清訳『ドイツ・イデオロギー』を読んでいた記憶があります。2年の時，東洋史は明治大学教授の三島一先生の授業を受けたのですが，その縁で同級生の宇佐美誠次郎君と先生のお宅へよく伺って教えを受けました。先生が発起人の1人となって7年12月に歴史学研究会が創立されますが，例の東大入試の試験科目歴史の発表後は毎日，経済学部志願者が先生のお宅へ参上して特訓を受けました。その前でしたか，歴研の機関誌が売れないで困るから会員になって買ってくれ，と先生に頼まれ，高校生の身で会員となり，その後大学へ入ってから宇佐美君らと現代史分科会を組織し，研究会をやったことがあります。また当時創刊の『歴史科学』，また刊行を開始した『日本資本主義発達史講座』の影響などは言うまでもありませんが，これらの雑誌や『講座』はよく知られていることですから省略します。

お茶の水科学ゼミナールのこと

杉本　ただ一つ戦後に戦前の科学活動として誰も伝えていないお茶の水科学ゼミナールのことに触れておきましょう。いまお茶の水の順天堂大学の並びに日本学生会館という修学旅行用のホテルがあるでしょう。あれは戦前は文化アパートと称し，いまのマンションのはしりでしょう。経営していたのは元北大教授の森本厚吉という方です。この方は有島武郎の友人で，新生活運動のパイオニアで，アパートの裏に女子経済専門学校を経営しておりました。昭和8年の7～8月にこの学校を借りてお茶の水科学ゼミナールが開かれたのです。科目は哲学，歴史，経済学，政治学，自然科学などで，講師団の中心は唯物論研究会々員でした。どうしてこのことを知ったか記憶しませんが，たぶん雑誌『唯物論研究』に広告が載ったのでしょう。宇佐美君といっしょにこれに参加しました。募集要項や聴講カードなどは，13年の唯研弾圧などがあったのち，危険を予想して廃棄したらしく，いまないのが残念です。戸坂潤，三枝博音，岡邦雄，

羽仁五郎，野原四郎，杉本栄一，河西太一郎，石浜知行，佐々弘雄，安田徳太郎といった顔触れでした。戸坂さんはヘーゲルの "Encyclopädie. Einleitung", 三枝さんは "Philosophie des Rechts. Einleitung", 羽仁さんは Schmückle の "Zur Kritik des deutschen Historismus" (Unter dem Banner des Marxismus, Jg. 3. Ht. 2, 1929), 野原さんは『支那古代史に於ける「詩経」の史料的価値—郭沫若・オシポフ・グラネ氏等諸説の比較研究——』, 杉本さんはシュンペーターの "Das Wesen und der Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie. Zweiter Teil. Das Problem des statischen Gleichgewichtes.", 河西さんはカウツキーの "Die Agrarfrage. Grossbetrieb und Kleinbetrieb", 石浜さんは Christian Eckert の "Englands Aufstieg und Gefährdung in der Weltwirtschaft" の一部をテキストとされました。野原さんを除いて全部ドイツ語でやるわけです。教材はここにありますが，手書きの謄写版刷りで5～60ページの冊子になっているのを実費頒布，受講料はいくらか忘れました。

ところでこのゼミナールを企画し経営したのはだれかということですが，唯研ではなかった。申込みの受付は文化アパートの半地下室でやっていましたが，30代の2人の青年がいた。あとでわかったが，この人々が財部健次と佐木秋夫でした。二人とも東大宗教学科の同窓で，財部さんは戦後になくなったようですが，佐木さんは健在で創価学会など宗教問題で筆をとっておられるようです。財部さんらは天理教の中山正善さんと同窓で，深川の海産物問屋の息子さん，インド仏教美術の研究家で，お金が自由になるのでこの関係の蒐書につとめられ，そのコレクションはいま天理図書館に入っている由です（財部さんについては『図書新聞』1981年10月17日付の八木佐吉さんと反町茂雄さんの対談「秋・紙魚の昔がたり」を見て下さい—追記)。ゼミナールは大学が夏休みに入る7月初から8月いっぱい，あるいは9月初まで1科目20回位はやったでしょう。その間に安田さんのセックス論や岡さんの技術論（?），佐々さんの政治理論がありましたが，これらはテキストを使わなかったので，よく憶えていません。受講者は少数でせいぜい10数人，とても採算はとれなかったでしょう。多分お金持の財部さんが赤字を埋めたのでしょう。中間に受講者と財部さんや講師との懇談会がありましたが，うろ覚えですが，財部さんが戸坂さんと相談して開いたようでした。

細谷 このドイツ語のテキストは内容もすごく高級ですね。

杉本 その通りです。主催者は大学生を対象と考えたのでしょうが，高校3年で参加したのは無理だったかもしれません。ともかく大学レベルの講義をはじめて受けたわけです。教材がいま残っていますが，杉本栄一先生のシュンペーターはなかなか入念なもので，たくさんグラフや数式が書き込んである。パレートの選択の理論，無差

別曲線，オフェリミテなどはじめて聞いたわけです。このゼミで『資本論』などやらずに，なぜ杉本先生がシュンペーターを引っ下げて出講したのか，当時も不可解でしたが，いまもってわからない。

細谷　高島善哉先生にきいたらわかるかも知れませんね。

杉本　うん，そうかも知れない，今後折があったらきいてみて下さい。

細谷　え，そうします。

杉本　河西さんはカウツキーでしたが，当時出版されていた向坂訳は Kost を費用と誤訳していると教えてくれたことを憶えております。

細谷　学校じゃないんですね。

杉本　昔流に言えば講習会，資格などやかましくない。受講料さえ払えば参加できる。戦後になって自由大学とか私の大学というのが開かれたことがありますが，そのはしりだったのでしょう。

細谷　三枝さんたちが戦後に鎌倉アカデミアを開かれたのは，この経験があったからでしょうか。

杉本　そのへんはわかりませんね。三枝先生にうかがっておけばよかった。

東京大学経済学部

杉本　東大に入学した昭和９年の春は満州事変から２年半が経過し，５・15事件（昭和７年），そして昭和８年の滝川事件が起ったあとですが，滝川事件は高等科の３年生の時ですから関心をもっていましたし，『刑法読本』は発禁になるまえに買っていました。事件の本場は京都だけど，東大でも抗議運動があり，垂れ幕なんかが校舎に下げられ，私も本郷へ観戦に行きました。滝川事件に対する反対運動の学生組織は高代会議です。これは当時自治会という名前の学生組織はなく，顔見知りというのは同じ高等学校から来た連中ですから，高校ごとにまとまった高校代表会議が主体なのです。武蔵の代表には一年上の岡倉古志郎が出ていました。

この滝川事件の一年後で沈滞期です。学部長は土方成美で，経済原論担当でした。原論は舞出長五郎さんもやっていましたが，土方さんと法経両学部の授業を隔年交替で担当していた。私が入学した年度は土方原論に当った。つまらなかったが大学の講義ははじめてですから，ちゃんと出席して一生懸命ノートをとったりしました。二年生になってからは一年生のときほどは授業に出席せず，のちに言います学生消費組合の仕事をやり，あとはプリントを利用しました。二年になると演習（ゼミ）志望ができる。はじめ宇佐美君といっしょに日本経済史の土屋喬雄先生の演習に申し込んで採用になった。当時資本主義論争はなやかなりし頃で，高校以来私たちはこれに関心をもっていた。岩波の『日本資本主義発達史講座』が出版されたのは昭和７～８年，高校生のときです。『中央公論』や『改造』などで，向坂逸郎とかいろいろな人が講座

（派）を批判するとそれらに対する反論が『歴史科学』，『経済評論』などに載るという有様でした。演習でもこの論争の検討がいろんな角度から行われていたようです。だから土屋先生の演習に入ろうとしたのです。大内兵衛先生の演習にも申込んだのですが，入るのはなかなかむずかしいと聞いて，土屋先生にも申込んだところが，こちらがはじめに決定して大内先生の面接があとになった。その面接で，新規に二年生は宇佐美君と私が採用になった。そこで土屋先生の方は辞退しました。10年度の大内演習生はあと全部３年生でした。前年度から農村財政の調査をやっていましたので，３年生はその調査をやった人々でした。

細谷　大内先生のゼミは自宅でもやられましたか。

杉本　御宅へもたびたび伺いましたが，ゼミは学校です。２年生は二人しかいなかったが，３年生で１年間だけ参加したなかに山本二三丸君がいました。僕が３年生になったら，向坂正男とか井上準之助の遺児井上四郎などという人が入ってきました。演習で何をやったかといいますと，２年生のときは『資本論』の「本源的蓄積」のところと「地代論」でした。

細谷　その頃『資本論』をやれたんですか。

杉本　やれたんですよ。山田盛太郎先生が『資本論』をやるといったら教授会で否決され，ヒルファディング（『金融資本論』）ならよいと言われたとかいう話が伝わっていますが。３年のときはスミスの『国富論』でした。大内先生が検挙されたいわゆる教授グループ事件（第２次人民戦線事件）は（昭和）13年２月で私が卒業したあとです。

東京学生消費組合のこと

細川　学生時代に東京学生消費組合（以下学消と略称）に関係されたそうですが。

杉本　武蔵高校は卒業生が東大へいくときいろいろ注意をするんです。東大でこういうところに関係しちゃいけないとか（笑），学消の組合員になっちゃいけないとか，いろいろと諭すわけ。そういわれると逆にやってやろうという気になるんだけれど（笑）。そこで宇佐美君ともども学消組合員になったんです。私も『図書評論』復刻版の思い出に書きましたが，宇佐美君がどういう関係だったか知らないが一高出身の連中と知り合いになって，その連中の一部が学消の委員をやっていた。それで学消の仕事をやれと言われたらしいんです。それで私も一緒に委員になりました。私はやっぱり本が好きだっていうことで，図書部を受けもつことになって，図書の仕入などやりました。正式名は東京学生消費組合赤門支部なんですが，当時の他の支部，早稲田は経営活動を余りやらない，政治活動ばかりやって（笑）。法政もだめでした。明治学院に白金支部があり，駿台支部――今のお茶の水の巌翠堂という新本屋のあるところあたり――があり，拓殖大にもあったんです。赤門支部は経営状態が良く，中心にな

っていました。他は経営状態が悪く，全部お荷物の情況でした。学消の理事長は賀川豊彦さん，協同組合運動の長老です。彼が理事長で，専務理事は杉　善さん――この人は杉道助（元大阪商工会議所会頭）の甥――で，のちに山岸晟さん――法政の卒業生で，江東消費組合などで活動，いまは印刷会社三秀舎の社長――でした。学生は委員です。当時の社会情勢ですから，学生委員は学生運動の一環であるとされたから，やはり本富士署の特高係がしょっちゅう来るわけです。どういう学生が委員をやっているのかを調べに，それで皆ペン・ネームを使い，本名で呼び合わないんです。

細谷　普段もですか。

杉本　そうです。『図書評論』に書くときは勿論，日常業務活動をするときでも，僕は小杉君にされた。常務者が杉本は小さいから，「君，小杉君にしろや」というわけです。図書部では図書の売上げをのばすためにＰＲ誌を出そう，特別に経費は計上できないから広告代でまかなうことになりました。学消の取り扱う本には左翼出版社の委託が多かった。当時の書籍の販売ルートというのは今みたいに東販・日販のような大取次はなく，東京堂とか，北隆館，上田屋，栗田などのほか多数の取次店があった。岩波や有斐閣などのものはこのルートで仕入れなければならないけど学消は叢文閣とか白揚社とかの左翼出版社とは直接委託取引するわけです。売った分を支払うということですから，そのうちから広告料を差引くというわけです。『図書評論』はあまり定期的には出なかった。経費は一号80円位はかかったと思う。組合員に一冊ずつ配布しました。創刊号が昭和９年12月10日の日付ですから，私が参加したときはすでに出されていました。私が編集に直接加わったのは第８号（1935年９月25日発行）からです。それまでは手伝い程度でした。この第８号からは実際に私が責任をもち，編集長格でやりました。８号からと明瞭に言えるのは表紙のデザインを変えたからです。バウハウス流のレイアウトの真似をして，字体を変え，表紙目次を横組みにし，中央左寄りに縦に太い罫を入れ，左側を白にしたんです。

細谷　目録が載せられていますが。

杉本　目録は最初から新刊書目録があり，２号から論文目録があります。７号まで手伝っていましたが，８号からは全面的に私が責任者になって，現物に当ってつくりました。論文は学消で扱っている雑誌のものを先ず採録し，ないもの――学術雑誌なんか――は東大の附属図書館の雑誌室で採録しました。短冊型の紙をつくり，それに写すわけです。

細川　論文目録には文芸・芸術・小説まで入っているのは，先生が……。

杉本　学消が扱っている雑誌には文学・演劇雑誌もあり，そのような一種の同人雑誌的なものは，普通の本屋においてくれない。それで学消へ委託にもってくるんです。窪川（佐多）稲子さんなんかも来たようですよ。こういう関係の採録は佐々木基一君

がやった。

細川　『図書評論』復刻の別冊「思い出」に書いてありますね……。

杉本　杉浦明平さん，この人は一高から来た人で実に熱心な組合員で，一番本を多く買っただろうと言われている人です。『唯物論研究』，『歴史科学』，『経済評論』，それに京都の『世界文化』などいろいろ取り扱ったんです。

細川　先生の紹介された『満州評論』は……。

杉本　『満州評論』は私が大連まで手紙を出して取引をはじめました。『満州評論』は今なかなか保存されていないようです。それでリプリントが出たようです。

細川　『図書評論』の先生の最初は，昭和11年の第10号に「支那に関する最近の諸著作」を執筆されていますが。

杉本　昭和11年１月にでていますか。この時大原社会問題研究所とも雑誌の交換をしていました。大原の雑誌が月刊になって，それに載っていた支那についての情勢を紹介して筆者は細川嘉六あたりと推測したら，大原からあれを書いたのは細川じゃないと連絡がありました。

細川　先生の著作メモをみますと随分中国関係のものがありますが。

杉本　僕の中国に対する関心は，中学生の頃で，山東出兵とか済南事件，勿論満州進出とかこういうことは一体どういうことか，どういう性質の歴史的事件であるかということを確かめたかった。武蔵の尋常科のとき，教頭がなにかの授業のときに「眠れる支那は目覚めさせない方がよい，いつまでも眠らせておくのが日本のためだ」といったので，おかしいなと思った。ああいう後れた，抑圧された国民が目覚めて起ち上るのを援けるのが本当じゃないかと。このへんが中国問題に関心を持った最初の動機です。それで高等科時代から中国関係の文献を集めました。とくにソビエトのアジア的生産様式論とか，マルクス主義的な中国研究の本を……。

細谷　そうしますと書物を集めだされた一番最初のテーマが中国ですか，先きの造型芸術の方は別として，社会科学では中国関係の書物が。

杉本　そうですね。やはり宇佐美君がそうでして，二人協力して集めました。この『図書評論』の最後の号は「支那問題特集」でしょう。発行は私らが卒業した年の数カ月後ですが，編集は私らがやったんですよ。1937年８月発行だから，支那事変がはじまって……。

細谷　この号が最後ですか。

杉本　これが最後で，ここに久坂権太郎という名前で宇佐美君のつくった「中国問題文献目録」というのが載っている。彼は卒業とともに東方文化学院東京研究所の助手となり，中国研究を専門とすることになった。これには僕も協力してつくったものです。

文献収集，古本屋のこと

杉本　中国の文献については，一つは先きにも話したように父が鉄道関係だったので，満鉄に知己もあり，大震災前後の頃に満州へ行き，いろいろ満鉄の調査資料をもらってきて，それが家にあったこと。もう一つは自分は詮索好きの方である，調べごとをするのが向いているので，調査みたいなことをしたいという気持をもっていた。それで満鉄の調査活動には関心をもっていました。だから『満鉄調査月報』，東亜経済調査局の『東亜』は毎号買っていました。東亜経済調査局には東亜会という外郭団体があって，年会費を払込むと出版物の全部を送ってくれる，「秘」と赤字の入った調査書なども頒布していました。『満鉄調査月報』は海文堂という神戸に本店がある海運関係の出版社が扱っていました。海文堂はいま東京に移りましたが，その小売店が神田の小川町の角にあり，どういうわけか満州関係の出版物，満蒙文化協会などの出版物を売っていました。それでバックナンバーや非売品でない満鉄の調査書の類などはここで入手できました。

それから左翼雑誌を集めました。『マルクス主義』とか，『インター』，『プロレタリア科学』，『産業労働時報』，『労農』，『前進』なんかを。こういうものは本郷の夜店に出るのです。

細谷　夜店があったのですか。

杉本　え，夜店があったんです。赤門から本郷三丁目の交叉点まで西側に夜店が出るんです。神保町だって，すずらん通りに本の夜店があったんですよ。そこへ行くとぞっき本が一杯ある。日評，改造社，叢文閣等々，債権者が処分したり，問屋が叩き買いしたものが出る。改造社の『経済学全集』や『マル・エン全集』など円本も20銭ででるわけです。ツガン・バラノフスキーの『英国恐慌史論』なども当時はぞっき本にでましたが高い方でした。

細谷　横文字の本も夜店で売っていましたか。

杉本　少しはありましたが，横文字専門という夜店はない。

細谷　服部さんの国際書房は昭和初期にドイツからマルクス主義のパンフレット類を入れたそうですね。

杉本　あの人は神戸から東京へ出て来た珍しい人でしょう。そのほか1920年代にドイツの社会科学文献を輸入した四方堂というのが牛込の矢来にあったんですね。どういう人が経営していたか知らないんですが，当時入った本にはよく四方堂というレベルが貼ったのがかなりあります。いつ廃業したのかもわからない。日本の洋書輸入史があるとよいのですが。第1次大戦後のドイツのインフレーションで本がひどく安くなった。それで個人が自分で輸入して通信販売というようなやり方もあったのじゃないかと思います。それから白木屋が洋書の輸入をやった。そういうレーベルを張った

のがある。

細谷　これは知りませんでした。

杉本　三越の洋書部は昭和6年頃にはじめましたよ。三越洋書部のアナウンスメント「The Piper」が家にあります。父のところに送ってきたもので，第1号からあります。

細谷　それは貴重ですね……。

細川　先きほどの国際書房というのは。

杉本　国際書房は服部さん，大塚金之助先生とも関係がある人，細谷さんがよくご存知で，神戸高商の卒業生でしょうか。

細川　河上肇文庫に国際書房への注文状が送られずに残っているのを思い出し……。

細谷　それは神戸のお兄さんの方のお店です。今の服部さんは神戸高商を卒業して，はじめお兄さんのところで手伝っていたんです。それから神田ではじめたんです。かなり古いですね。

杉本　古いようです。大正何年頃からはじめられたか。ともかく彼は非常に特殊なモノグラフなんかを丹念に輸入して，学者の研究材料を供給した人です。比較的後に，大河内一男先生が『独逸社会政策思想史』を書いたり，大塚久雄先生が『株式会社発生史論』を書いたりしたときの土台となった文献の多くは服部さんのところが入れたんでしょう。

細川　先生，その古本屋のことをもう少し話して下さい。『図書評論』の先生のお書きになった「最近資料流行のこと」は当時の古本屋の状況を書かれたものですが。

杉本　僕が神保町あたりへ行くようになったのはやはりはじめは武蔵の尋常科の教科書に関係してですね。神保町の方からいくと右手の鶴屋という本屋が出張販売するわけです。ところが全部揃わない。あとは直接店へ行かなきゃならないんです。それでちょこちょこ神保町界隈に行くようになったんです。

細谷　じゃ，中学時代から……。早いですね。

杉本　そうすると，神保町あたりを歩き，参考書を買うわけです。今でもそうですが，新刊書でも古本屋へ行くと安いわけです，だから本を買うなら古本屋で新刊本を買った方がいいというわけです。そのうちだんだん本屋を覚える。神保町界隈は今のように立派じゃないが，震災後次第に復活してきました。とくに厳松堂の店は大きく，どんな本でもあるような店でした。

そのうちに『古書通信』が刊行されはじめた……。

細谷　その頃誰がやっていたのですか。

杉本　八木さんです。八木さんは一誠堂で修業した人で，いまは弟さんが古書通信をやり，兄さんは八木書店という特価本の卸と出版をやっています。『古書通信』を

みてみると，古本のことがいろいろわかるでしょう。当時，『古書通信』は古本相場を発表し，それが業界で問題になった事件がありました。学生のときには古本屋の主人と顔馴染みになることはほとんどないです，購買力がないですから。古本屋さんと懇意になっていったはじめは本郷の原広さんです。原広さんは現在洋書の古本にかけては業界の最長老ですが，80数才で健在です。原さんは小学校でただけで，大正のはじめ当時神田で唯一だった堅木屋（かたぎや）という洋書の古本屋に勤め，一橋に東京高商があった頃，三浦新七，金子鷹之助，高垣寅次郎とかの学者にひいきされた方ですが，この店を辞めて独立したが，はじめは店舗をもたず，住まいで通信販売をしてたんです。そういう人がいることを僕がどうして知ったかというと，大森の池上通りに東湖堂という古本屋がありました。そこへ僕はちょこちょこ行って馴染みになった。この人は古藤という姓で，自分の姓の発音を逆にしてトウコ堂としたんです。北九州で農民組合運動をした人で，東京へ出て来て，兄弟で古本屋をはじめた経歴の人です。そのうち学消で古本屋に委託して古書部をはじめようということになった。そうしたら偶然に東湖堂の弟が来た。「ああ，あんたか」ということになったわけです。彼が古書部に毎日来て，市に行って仕入れてくる，そして学消で売るわけです。それで普通の古本屋よりも安いわけです。そのうち，発禁ものなんかでると，私たちの方に回わしてくれます。例えば河上肇先生の『資本論入門』の最終版，改造社の上製本，これは出版されるとすぐ発禁になった。「こんなものが出ました」といって回わしてくれる。こうして入手困難な本を手に入れることができました。この古藤さんが「今東京で洋書の古本を扱っている第一のベテランは原広さんだ」と教えてくれた。原さんは猿楽町の住まいで，学者相手ですから，当時学生なんか知りませんでした。この方が少したってから世帯をもち，赤門前に店をかまえた。ところがこの店が『図書評論』を印刷していた白文社のあとでした。それは昭和11年の春のことでしたが，原さんはとくに経済書専門ですから，よく行って教えてもらいました。4年後になりますが，東洋経済新報社を辞めて世界経済調査会に入ってから，図書室を整備するため，かなり本を入れてもらいました。

2　東洋経済新報社から世界経済調査会時代

東洋経済新報社へ入社

杉本　それでいよいよ卒業，就職でしょう。その頃は準戦時体制です。少しは景気が上向いていたんでしょう。東大の就職斡旋についてはよく憶えていないんです。学部の事務になにか手続したようなことは記憶にないです。その頃特定の先生が特定の会社へ推薦するんだというような話を聞いた気もします。私は余り就職に関心がなかったのかな，大学には頼まなかった。結局，父が自分の知人だとか，郷土の先輩とか

へ話してくれて，まず大同電力を受けることにしました。社長の増田次郎が父と同じ静岡県出身で同郷の先輩ということで，父に社長宅に連れていかれ挨拶しました。しかし受験したが，結局落ちました。当時問題になっていた電力統制問題について業界の態度に反するようなことを述べたからだと思います。もう一つは鶴見製鉄造船です。これは浅野系で，父のいた南武鉄道と関係があり，浅野良三社長は南武の取締役でもあった。工場見学をして社員クラブで受験しました。作文課題の日本製鉄業の将来を論ずを山田盛太郎先生流に日本製鉄業の軍事的，なんとか的性格といった調子で書いたと思います。そのせいかここも駄目でした（笑）。これには後日談があり，東洋経済の記者になって，鶴見製鉄を担当しました。記者は社長に面会して取材するのです。それで私が取材に行くと秘書がびっくりし，浅野社長に会ったら，「君か，君は会社向きでない。やっぱり東洋経済なんかに一番向いているよ」と言われました。このように二つ受験したが駄目になった。

大内先生のところには，三宅晴輝という東洋経済新報社の幹部がよく来て，「誰か希望者いないか」と言ってきたらしい。そこで宇佐美君やその他が訪問して条件を聞いたところ，勤務がハードなのに給料が安いというので皆逃げ帰ってきた。それじゃ俺がと受験したら，合格しました。55円の初任給でした。昭和12年３月当時，55円というとオーダーメイドの背広一着ですよ。普通の会社へ入ると80円位ですか。

細川　先生の入社されました頃の『東洋経済新報』をみていましたら，昭和12年３月20日号（第1751号）の「編集だより」欄に「早大出身の奥原時蔵，白井新人，仙波太郎と東大出身の杉本俊雄〔朗の誤植〕の４君が調査部に入社……」とありました。

杉本　この記事は私は覚えておりません。私は確か卒業式前から勤務していました。栂井義雄さんが『書斎の窓』に書いた「経済記者からの上昇」のなかで，私たちのことを書いていますが，それには昭和12年３月採用となっているので，正式入社は３月らしい。調査部に入ったのだったかな。奥原時蔵君はいまは経団連専務理事，白井新人，仙波太郎，いずれも早稲田出身だった。

細川　「編集だより」をずっと追ってみますと，松川七郎さんが先生の少しあとに入ってこられます。

杉本　そうです。松川君は３月に卒業できなかった。彼は年は私より５つは上でしょう。非合法の地下運動に携わり，滝川事件のころ逮捕され，保釈で出てきて復学し，一年間で残っている科目全部を受けたんですが，いくら彼でも全部合格できず，再試験で５月に卒業したわけです。それで就職を大内先生に頼みに行ったら，「東洋経済に行け，こういうのが入っているよ」と言われ，私を尋ねて来ました。社内事情を説明して上げましたが，三宅さんが追加として採用したのです。

細川　もう少しあとになりますと岡部利良先生が大阪支社を辞め，大学院に入った

と。

杉本　彼は蜷川先生のところへ戻るということでした。それで新入りの歓迎会と岡部さんの送別会とを一緒にして，おでん屋の二階でやりましたよ。岡部さんは大阪にいて，『在支紡績業の発展とその基礎』という本を出版部で出しました。雑誌連載のものを拡充してね，これは彼の置きみやげです。

調査部は，要するに新米だからすぐ記事が書けない，そこで何か課題を与えられてやらされるところです。私は翻訳をやらされたが，いま憶えているのは，ピーター・エフ・ドラッカー（Peter F. Drucker）の翻訳をしたことです。戦後有名になったドラッカーがこんな時代に，もうアメリカへ渡っていたらしい，何に載ったものか内容も忘れてしまったが，多分翻訳の練習でやらされたのでしょう。それで調査部にいて，翻訳や校正をやったりして，つまり見習いみたいなことを数カ月やって，日付は忘れたが，各部に配属される。だいたい産業部が中心です。ここで商品と個別会社を担当するんです。それに一般経済，というのは財政・金融，それと海外です。一緒に入社した四人のうち，白井君と私は産業部に，奥原君は一般経済部，仙波君は海外部にいった。産業部で僕が担当したのは，工作機械，製紙，木材，あとで鉄鋼でした。あとで入った松川君は繊維でした。

細川　先生，お話が先きにいくのですが，三宅晴輝さんの名前で書かれた本がありますね。

杉本　戦後に……。

細川　その三宅さんという人は当時営業局長かなんかですね。

杉本　この人は本来ライターです。早稲田出身で猪俣津南雄と親しく，リベラルな人です。

細谷　コンツェルンの本を書いた人……。

杉本　コンツェルン読本を書いた。この人はもと電力記者です。電力業界の松永安左ヱ門とかに親しかった。ところが石橋湛山とは合わなかった。それで編集局長から営業局長に回わされました。だけど社内では人望のあった人ですよ。とくに記者には。話が先きになるけれど，僕らの在社中三宅さんは，さらにまた九州支局長になる。それが昭和14年頃じゃないかな，汪兆銘の政権ができたとき上海に渡り，取材して帰ってきた。九州の太宰府の近くの温泉で原稿を書いているうちに，憲兵隊に捕まった。それが何で捕まったか本社でわからなくて，結局宿屋で喋ったことが不敬罪になって捕まったのですが。それで東洋経済新報社を辞めさせられました。このあと鮎川義介と親しかったので，日産がつくった財団法人義済会に関係し，戦争末期困っていた大原社会問題研究所に義済会が援助する話をまとめました。また太平洋協会の理事もしていました。

細谷　小熊さんは。

杉本　その頃小熊孝さんは統計部長ですね。栂井さんはまだ部長ではなかったと思う。栂井さんは器用な人ですが，なに部におられたかな。私の入った頃は財閥と戦争とかいう小さな本を出版部から出されました。彼は三宅さんの代筆を随分しました。三宅さんは親分肌でね，どこからか仕事を引き受けてくると，記者に小遣銭稼ぎにとばらまいたり，若い連中を飲ませたり，御馳走するのが好きでした。

細谷　ただし，書いたのは自分の名前で……。

杉本　序文で断ってあるでしょうが……。それから僕は理研コンツェルンを担当していました。理研は大河内正敏の科学主義工業を掲げていた，理研の富国工業の専務をしていた磯野信威，正敏子爵の長男ですが，プロ科をやっていたし，例の「講座」にも書いています。昔の仲間が刑務所や警察から出てきて，どこも雇ってくれない。そういう人たちをどんどん雇うわけです。井汲卓一さん，壺井繁治さんとか，のちの大月書店の小林直衛さんとか，その他の多くの人を雇いました。『科学主義工業』誌には風早八十二さんなんも書きました。この雑誌は一応別会社でしたが，随分単行本や雑誌を出版していました。本社は日比谷の角，今の朝日生命のビルにありました。理研担当だった頃，理研の工場を見学にいきました。例の農村工業ですから，高崎から群馬，さらに信州，新潟にかけてでかけました。そのとき石橋湛山のカバン持ちをやりました。

細川　個人的な関心ですが，河上さんの女婿鈴木重歳さんについて……。

杉本　鈴木重歳さんは，私の入社したときにもういました。東洋経済は『オリエンタル・エコノミスト』という英文の月刊誌を出していました。それは本誌に載ったものを翻訳して外国向に手を入れて載せるわけです。彼はその翻訳を担当していたんです。それから英文号のために特別原稿を書き下すこともあります。彼は山形高校時代に外人教師の家に居候していたらしく，英語が上手だった。京大経済在学中は蜷川ゼミだった。蜷川さん推せんで河上肇先生の次女芳子さんと結婚したんですね。

細川　先生は御本人とお逢いになっているんですか。

杉本　東洋経済に入ってはじめて知ったんです。勿論同僚だったからお茶飲みにいったりしていた。いま言ったように彼は翻訳屋で，記事を書いているわけではない。そのうち彼がどうして東洋経済を辞め，満鉄へ行くことになったか，その事情ははっきり知りませんが，いよいよ満鉄へ行くことになって，出発の日私たち東京駅へ送りに行きました。その時河上先生も送りに来られ，プラットホームで逢いました。それで彼は上海へ行ったのです。私が東洋経済を辞め，世界経済調査会に入ってから，昭和16年暮の太平洋戦争がはじまる数カ月前，上海へ資料集めに出張したとき，彼の家に1週間か10日間位泊めてもらいました。その時芳子さんは子供さんとともに里帰りして

おられたので，家には中国人のお手伝さんしかいなくて，「泊れよ」といってくれたんです。帰りに，東京は食糧不足だからお祖父さんに持って行ってくれと，ビスケットやコーヒーなどを託されて運びましたよ。帰って来て，東中野の氷川町のお宅を訪れました。芳子さんはまだおられて，二階へ上がり込んで，河上先生と何時間位話したか忘れましたが，上海の情勢とか，上海でレーニン全集の新版が売り出されているのをフランス租界で買ったこと，ユダヤ人の亡命者が食えないからこの種の文献を売るんですが，買っても持って帰れない，それで重歳さんに全部あずけてきたことなどを話しました。河上先生は当局が来て，この種の本を出せと言い，自分も本をとられた話をされました。私が行ったのが昭和16年の10月半ば頃でした。河上先生は年内に京都へ引き揚げられたんですね。東中野のあの家は二階建の薄暗い，昔風の借家でした。

私は東洋経済新報社に3年半ばかり在職し，15年9月に退職しました。同僚4人との連袂辞職でしたが，その経緯は省略します。要するに経営方針について記者の大先輩である石橋湛山主幹と若手記者との行き方の違いによるものです。辞めて2カ月ばかり無職でしたが，大学時代の友人がドイツ経済の研究をやらないかと言ってきた。留守中に関係責任者とともに来訪してきた。どういうとこがやるのかというと……。

世界経済調査会時代

細川　先生，それが世界経済調査会の前身……。

杉本　結局この話に乗って入ったのが日本経済連盟対外事務局ドイツ経済研究部というもので，郷誠之助が会長です。経済連盟というのは，今の経団連みたいなものでしょうか。これがまた，実に面白い話なんですが，戦争に入る前に，満州開発に日本資本が足りないからアメリカ資本を導入するという話です。ルーズベルト大統領の親友だというふれ込みのオライヤンという人物がやって来て，アメリカ資本を満州開発に導入を斡旋してやるとか。日露戦争後のハリマンみたいな話です。日本の財界が喜んで，運動資金を集めたりしたらしい。それで連盟にオライアンの言うことが本当かどうか，アメリカに対外資本輸出の余地があるかどうかという照会です。それを調べるために，アメリカ経済研究部をはじめて創ったらしいのです。それでアメリカだけでなく，ドイツ，イギリスの順で研究部をつくることになり，事務局長はＩＬＯにいた鮎沢厳さんで，研究部は庶務課長の伊達宗雄さんが事務的に面倒を見ていた。この方は中山伊知郎先生と同級生，やはりＩＬＯ東京支局にいたが，日本はＩＬＯを脱退

したので，ここに来ていた。創価大学におられたのですが，もう引退されたかもしれません。ドイツ研究部は最初は私しかいない。まず図書資料集めをやり，半年ばかりのうちに研究員が２人ふえた。日常の仕事はドイツの戦時経済を財政，金融，物価，生産，貿易という部門ごとに動きをとらえることでしたが，データも乏しい段階でしたから分析的なことはできず，適当に処理しながら第１次大戦後からワイマール時代の経済を今後の参考にと調べることにしました。これは業務ではないのですが，ドイツの辿った道があるいはわれわれにも……といった予感をもってのことです。

宮地　それで先生が中国問題から金融問題に変られたのは……。

杉本　金融というのは，私の学生時代は農業問題が中心でなかなか入りにくいんです。東洋経済へ入ってやった産業とか会社の経営分析はやりやすいものです。やはり，金融も勉強しなければと，大内先生のところへ相談にいった。そうすると先生がいろいろな本を出して来た。イギリスとか，フランス，それにドイツの例の金融資本的な産業金融とか，アメリカはこの本を読みなさいと。私もある程度読んでいました。金融を勉強しだしたのは昭和14年でしたかな。

細谷　それから太平洋問題調会編『中国農村問題』は。

杉本　あれは学生時代の延長ですよ。岩波で出していた満鉄の『東亜研究叢書』で，平野義太郎さんが満鉄へ持込んで満鉄調査部の企画となった。宇佐美君が平野さんの依頼を取次いだ。

細川　先生，それではドイツ部門でもっぱら何を……。

杉本　日常の仕事はさっき言ったとおりです。私だけがとくにやったは資料収集，ドイツ部門といったって，最初は本も何もない。昭和15年11月から行ったから，まだ本の輸入ができたんです。しかし，その当時のドイツ書はナチスの本でしょう。そこで私は一生懸命調べて，ナチス以前出版の本のストックをもっている Fischer, Mohr とか Duncker u. Humblodt のカタログをみて注文しました。ナチスはマルクス主義のものの焚書をやったでしょう。しかし学術的なものは残っているんですね。ちゃんと入って来ました。出版社も骨があるからちゃんともっているわけです。それを取りよせているうちに，国際文化協会，そこに日独の Bücheraustausch というのができ，外貨節約のため，ドイツが欲しい日本の本と日本が欲しいドイツの本とをバーターで交換する。そのなかへドイツ経済研究部も割り込んでリスト作りを私がしていた。

細谷　もう昭和15年だと洋書は入ってこないですね。

杉本　いや為替の割当はあることはあって，1940年には入っていた。しかし図書交換は一年位しかつづかなかった。要するに独ソ戦がはじまってシベリア鉄道が利用できなくなったら，もう入らなくなりました。そう昭和16年の５月頃までですね。本の扉の裏に，Deutsch-Japanische Bücheraustausch というゴム印が捺してあるもので，

私もそれに便乗して個人で注文したものが少し残っています。

細谷　一般に，丸善輸入でも入ってこないときには……。

杉本　独ソ開戦後はドイツ資料が入らないのです。それで文部省がベルリンに駐在員をおき，丸善もおきました。ヨーロッパの本をなんとか得ようとしたんです。Frankfurter Zeitung もナチスの Völkischer Beobachter も Deutsche Allgemeine Zeitung とか Neue Zürcher Zeitung とかも1941年は結局短期間しか入らなかった。

細谷　雑誌が入ってきたのも，昭和15年の末まで……。

杉本　いや1941年分の予約は丸善が受け付けたから独ソ開戦までにドイツから発送されたものは入って来ました。あとは中立国スイス経由でとる方法です。いろいろとやりました。外務省の情報部へもいったりして，それで方々の機関で本を集める役目の連中が集まって相談したこともあります。そのとき三菱経済研究所の担当者として猪木正道君が来ました。彼は僕と同期で河合栄治郎先生のゼミです。三菱信託に入社して，当時研究所に出向していた。彼は戦後政治学者になったが，最初は経済ですよ。

あとは日本に残っているものの収集，つまり古本屋回りです。だけど結構ありました。18年に関西へも行き，京都，大阪の日本橋筋，それから神戸のロゴスとか全部回りました。

細谷　丁度，大塚金之助先生が歩いていられる頃に先生も歩いていらっしゃいますね。

杉本　またその間，昭和16年秋に世経調から上海へ出張した。これは先きに少し話しましたが，アメリカとの戦争の半年前に野村大使が対米交渉しているでしょう。その最中の7月下旬に日本の在外資産が凍結されて，外貨が使えなくなるわけです。だから1942年度外国新聞，雑誌の予約金が送金できなくなった。ところが上海の英米租界へいくとアメリカの銀行もあるから，円を外貨に替えて送金できる。それをやってくること，そのほか租界に残っているものや，日本じゃ通関できない本も外交便を使うから買ってこいというわけで行きました。戦争のはじまる前の，昭和16年9月から10月の20日間位の上海出張です。その時は外交官パスポートをもらい，外務省の臨時嘱託です。

上海租界では満鉄などの連中が優雅な生活をしていましたよ。フランス租界の今で言うマンションに入っているんです。鈴木重歳君は貧乏性だから日本の共同租界の変なところに入っていました。フランス租界にフリートという本屋があって，今でも目録が残っていますが，ソビエトの本を昔のナウカ社のように売っていました。そこで買いました。

宮地　フリートとはどういう意味なんですか。

杉本　Fleet，艦隊という意味。Fleet Books Store といい，経営者はフランス人で

した。あとは英米租界にケリー・アンド・ウォルシュという——19世紀から英米人が創った小売店兼出版社——大きな店がありました。昔は横浜にも店をもっていたという。

細川　それで随分仕入れてこられたのですか。

杉本　全部総領事館に集めて送らせたので容量など見てないので，はっきりしません。それから中国側の奥地の本もある程度仕入れました。

私が入ってから半年位経って，財団法人世界経済調査会に改組したわけです。これは最初から予定されたことで，つまり外務省監督下の公益法人，外郭団体です。経費は外務省，満州国，日本銀行も出す。あとはスポンサーとして民間企業もあったでしょう。首脳部は，松岡洋右の枢軸外交によって首になった英米派の外交官，大使から総領事といった人々。

改組になって，ドイツ研究部とアメリカ研究部のほか英帝国研究部を創った。もう一つ日本は船が問題であったから，船舶研究部という特殊なものを創った。

細谷　先生が捕まったというのは……。

杉本　それでドイツ経済研究部にいたんですが，昭和16年の暮建物ができて，大手町の新常盤橋のたもとへ移った。大平洋戦争がはじまった，その直後一週間位あとに高校先輩の岡倉ほか数名がまた捕まった。彼は一度企画院グループで捕まったが出所していた。どうもこれは憶測ですが，特高側は同じ高校グループというのでリストアップしておいて，種がつきると，リストからピックアップして捕まえるという感じでした。

細谷　それはいつですか。

杉本　昭和17年4月です。4月の何日だったか，その日は日曜日だった。というのは土曜日昼に終ってから神保町の厳松堂へいきました。そこで Oppenheimer の Festschrift の "Wirtschaft und Gesellschaft" という大きな本を買った。それを持って浅草に行き，オペラ座かどこかを見て，食事をして帰った。翌朝6時頃に本庁から警部と巡査部長，それから所轄の大森警察署から3人位が来て，捕まったんです。オッペンハイマーの本は大判で早く内容を見たいので持ち帰ったので，よく覚えています。

細谷　だけど本を持っていかれたんでしょ。

杉本　和書だけですよ。

細谷　相当もっていかれましたか。

杉本　もっていかれました。あとで家人の話では小型トラック1台分だったそうです。

細谷　すごい，だって一人でもっていけないでしょう。

杉本　勿論捕まったとき家宅捜査して，私にもたせるんです。そして所轄署へ運ばせた。

細谷　トラックも用意して。

杉本　いや，あとから車を差し向けてとりにくるから，本人にはわからない。あとでリストを使って所有権放棄書に拇印を押させる，証拠品だといって。そして大森警察署に留置されたんです。

だが彼らは洋書がわからないから手つかずです。でも今から思うと随分とられた。面白いことに『唯物論研究』は全部もっていくが，『歴史科学』はもっていかない。翻訳本なんかは，ロシア人の「……スキー」といったもの，河上肇とか今まで捕まえた猪俣，佐野，福本とか，労農派とか教授グループのはもっていく，講座派はもちろん。もってかれた本がいま古本屋で高い，しかし内容上そんなに惜しいとは思わない。歴史上の資料だけど。でも大熊信行さんの『マルクスのロビンソン物語』のことをこんな本はお伽話にかこつけて怪しからんと言っているのは，おかしかった。

細谷　容疑は何だったんですか。

杉本　要するに結局調べたら，お前たちはミニ・コム＝アカデミーだ，講座派のセカンド・ゼネレーションだ，山田盛太郎なんかの二代目だというわけです。

細谷　だけど直接の容疑というのはあるんでしょう。

杉本　あの頃，そんなことはないんですよ。要するに，日本の変革の理論的準備をしていたというわけです。

細谷　それは当っていますね（笑）。

杉本　それと学生時代から何をやっていたかとか。言い忘れましたが，あとでわかったけれど，いっしょにつかまったのは高校以来の宇佐美君，彼の友人の戸谷敏之君，それから村野孝君の４人です。どうして４人がグループとされたか，わけがわかりませんでした。

結局，村野君と私は起訴猶予だか留保かでその年17年12月の暮近くに出て来た。戸谷君はもっと早く出たようでした。宇佐美君は起訴されて，18年中かに執行猶予になって出て来た。

その間，私の勤務先での扱いはどうかと言うと，日頃の行状がよかったせいか同僚たちが弁護してくれて，病欠扱いにしてくれて給料もちゃんともらいました。東亜研究所などでは直ぐ首になったでしょう。しかし思想犯保護観察法によって千駄ケ谷の観察所に呼び出され保護司の観察に付すという書類をもらった。これで自由に旅行もできなくなりました。しかしこの制度は実際はわれわれ程度の小者の場合，有名無実で観察所へ出頭したのはこれ１度だけ，あとは時局いよいよ大変だから自重されたいといったガリ版の手紙がときどき来るだけで，大して拘束された気がしませんでした。

職場にもどり，毎週１回ドイツ経済の現況をまとめるルティーンをやっていましたが，チューリッヒやリスボンなどからの情報しかなく，他方食糧事情も悪化してくるし，職場に警防団もできるし，全体として仕事が二の次になってきた感じでした。そのうち大手町界隈は危いから研究部ごとに疎開することになった。都留重人さんは開戦後に交換船で帰国し，外務省のなにかになり，世経調の客員みたいなポストにあった。これは私が留置所にいたあいだのことです。出てきてから彼と話をすることもあった。鈴木圭介，野々村一雄の２人が共通の友人でもあった。都留さんのお父さんは名古屋の東邦ガスの社長だったが，上北沢に東京宅があり，上京のときは使っていたが，甲州街道に近く坪数もあったので，軍に接収されるおそれがあり，都留さんから借りてくれという申し入れがあり，ドイツ研究部が都留邸に疎開することになりました。一部は都留家が使い，あとで坂西志保女史も住みました。当時の上北沢は農家もあり，野菜の調達の便宜もあり，割合に呑気でした。管理者がいないし，きめられたルティーンの仕事をやればそれでよかったのです。こうして終戦後数カ月まで上北沢で仕事をしました。

それで終戦。世界経済調査会は，マッカーサーの命令で外郭団体の整理があり，それにひっかかって，外務省から金がでなくなりました。これは戦争中軍なんかがいろいろな外郭団体，つまり右翼団体を養っていたのを整理することでした。それで皆食糧もないし，毎日来なくてもいいよ，何千円の固定給をやるから，あとは適当に食いなさいということになりました。事務所へは一週間に何度か適当に顔を出し，あとは買出しにいったり，あっちこっちへ歩きまわり，雑文を書いて飯を食うていました。そんなことを昭和23年頃までやっていたんですね。その間終戦の翌年１月に『世界経済』誌を私が編集責任者で創り，ヴァルガの翻訳などを載せていました。世界経済調査会の役員は英米派の外交官ですから，すべて復活しました。しかし皆な大使として出てしまうので，首脳部が弱体になりました。その頃私なんかが調査部の中心で頑張っていましたが，そのうち東亜研究所が潰れ，その残党の何人かを引き受けたりしました。

それからもう少し後ですが，私が戦後大阪市立大学の資料係をやっていたといった（本誌５号経済資料協議会「20年を顧みて」）こと。あれは座談会で原さんが言っているように，関西では海外の学術書が入らないでしょう。東京は早いけれど，関西はお手上げでしょう。それで大阪市大の経済研究所で東京に代理人をおかないと入らない，それを私にやってくれと頼まれた。そのうえ，名和統一さんの弟の名和献三君が失業していた。彼は関西学院の英文科を出て，戦争中上海の東亜日報にいた。彼が引き揚げてきて，市政調査会におった小森さんがつくった黄土社に入ったが，この出版社が余りながつづきせず，お手上げとなった。それで兄の統一さんが来て，弟を頼むということで，僕の口ききで丁度その頃に世界経済調査会に入ったわけです。世界経

済調査会を基地に献三君が官庁回りをして資料を集め，私が洋書集めを担当した。藤田敬三先生が大阪財界の南海電鉄の川勝伝さんなどに募金をしてもらい産業研究会という外郭団体を創った。その会から東京での資料収集費が出ていました。

細谷　献三さんに先生から紹介されたことがあります。

杉本　そうですか。

細谷　経済資料協議会をそのあたりから創らうと。

杉本　そうかも知れませんね。あの頃は情報が伝わりにくくて……。

細谷　僕は道家さんだと思います。

3　東京大学・東海大学時代

社会科学辞典編集主任

杉本　その前ですが，昭和23年春までは世界経済調査会に在職しましたが，低い固定給しか支給されず，みんな適当な口を探がせという気運になった。そのうち東大経済学部が創立30周年記念に何か事業をやろうということになったらしい。それで経済学辞典を編集しよう，でも国費ではできないから出版社にやらせることになった。この話にのったのが当時景気のよかった日本評論社です。一層つくるなら広げて社会科学辞典にしようということになった。日本評論社の美作太郎専務とか鈴木三男吉常務を私は前から知っていた。それで大学側の代表大内先生と相談して編集主任を私にやらせようということになった。日評側から交渉され，結局同社の嘱託を兼ねて社会科学辞典編集委員会に勤めることになった。行ったのが５月でした。最初は東大の名誉教授室を使いました。東大の資料をはじめは利用し，新しいものは日本評論社が費用を出して集めるということで仕事をはじめました。既存の関係辞典の項目をカードにとることが最初の仕事で，学生アルバイトを使って始めました。そのうち鈴木三男吉君の都立高校の仲間の大井正君がスタッフに加わった。哲学，社会学，文化人類学などの分野は彼にやってもらい，事項目や人名の選択をやりはじめました。彼は東大の哲学科を出て東亜経済調査局に入り，民俗学などやっていましたが，戦争がはじまると早く山形へ引き込みました。戦後東京が懐かしくて上京し，鈴木君に職場を頼みに来たのです。それから土屋保男君がやはり山形から上京してきました。彼は世界経済調査会にいたのですが，戦災のため山形へ疎開し，山形新聞の論説委員でしたが，レッドパージにかかり，同じく国鉄でパージになった仲間と八百屋をしていたが，食えなくなって上京してきたのです。それで三人で仕事をすることになりました。そのうち日本評論社の業績が悪化して，２年程で編集費がでなくなりました。

昭和24年の春に辞典編集室は経済学部の名誉教授室から図書館の建物内の社会科学研究所の隣りに移りました。そこはそれまで土屋喬雄先生が借りて，金融史資料の編

纂をやっておられた部屋です。そこで思い出すのは大井君が再建された日本哲学会の事務所の住所をこの部屋にしたので，新進の哲学者が出入りしました。そうしたらGHQの情報部の連中でしょう，二世の軍人が来て，どういう連中が集まるとか，どういう会議をやったとか，学会組織を調査しにやって来ました。日本評論社から金が来なくなったので，皆で稼ぐためにあれこれ辞典の下請けをやりました。

細川　それで先生，平凡社の……。

杉本　あれはもっとあとです。24～5年頃，大阪市立大学の経済研究所の人たちが入れかわり立ちかわり訪れました。大阪市大が戦後はじめて経済学辞典を編集するというので，その相談に木下悦二君，川合一郎君，崎山耕作君がきたり，道家さんも見えたりしました。それから昭和26年の春いよいよ初校が出たとなってから原稿の不備から収拾がつかなくなった。私は丁度今の片瀬の住いができ，東京から移ったときでした。岩波書店から電報――電話はまだついていなかった――がきて，「ゼヒオイデオコウ（是非おいでを請う）」と。いってみると，初校が出てもどうにもしようがないから不備を補って仕上げてくれということでした。藤田敬三所長が上京して，是非頼むと。土屋君も連れて岩波へ4月から6月まで通いました。

細川　初版の『経済学小辞典』の藤田さんの「あとがき」に先生に謝辞が書れていますね。

杉本　あのときの打上げで，岩波の近くのおでん屋の2階でとった写真があります。

宮地　どうにもならないというのはどういうことですか。

杉本　文献なんかが不正確だし，項目間の相互関連が駄目だし，生年，没年なども不十分でした。

東海大学教授

細川　その間に東海大学へいかれた。

杉本　東海大学は，もともと何かというと，戦争中に逓信省が三保の松原に電波練成所をつくった。この練成所はレーダーのオペレーターの養成所で，軍がこれに目をつけ，電波兵器のオペレーター養成所にしたんです。戦後それを東海科学専門学校にしたのが松前重義です。さらにこれを旧制大学の工学部にし，彼が学長になったが，彼が教職パージになったため，浜田成徳さんという人があとを引き受けた。松前さんは内村鑑三の無教会派で，浜田さんもそうで，私の両親もそうなんです。浜田さんとは，馬込の私の家と向い合わせでした。松前と同じ電気屋で，東芝の研究所長をやり，東芝の組合の初代委員長でもあった真空管工学の権威です。JICST の理事長もやりました。それで松前さんのパージ後，学校法人の理事長になった。無教会派で矢内原先生の仲間ですから，矢内原先生のとこへいき，技術だけでは駄目なので，文科系，社会科学系の学部もつくりたいと言った。そうすると矢内原先生が「杉本君がいるじゃ

ないか，彼と相談しなさい」と言った，と浜田さんが私を訪ねて来た。それで浜田さんに頼まれて経済学科のカリキュラムや教員組織をつくったんです。

細川　実際に講義をされたのですか。

杉本　文経学部，文化と経済というのを創ったんです。私は名目上は教授になったが，実質は辞典の仕事をしながら，通いの非常勤です。それでも泊り込んでね。金融論や外書講読などやり，それからいろんな人に出講をお願いしました。しかし清水では学生も集らず，経営が因難で，給与も遅配となり，東海大学を実質的な本職場とする見透しは立たなくなりました。そのうち静岡大学と横浜国大から話があり，神奈川県民となったから地元の方にきめ，東海大学の方は辞めました。

論説・辞典執筆こと

細川　その頃先生はよく書いておられますので，そのことに入りたいと思いますが，平凡社の社会科辞典は……。

杉本　あれは国大へ行くまえのことですが，長洲君から頼まれました。高島善哉教授が社会科の教科書執筆に関係してひいては事典編集ということになったらしい。高島先生代理として長洲君が来て頼まれました。そのあと平凡社が大百科をつくるから協力してくれと言ってきましたが，日評の仕事が棚上げになったから，土屋君を辞典の編集経験ありとして平凡社に紹介し，採用になりました。

細川　それから岩崎書店の『政治経済大辞典』は。

杉本　それは，要するに遊部久蔵君の友人の豊田四郎君がはりきって日本経済機構研究所を創り，そこの仕事としてやった。これは慶応書房がお金を出したんでしょう。中村秀一郎君が学生のときこの手伝をしていました。私の手元にありませんので何を書いたか……。

細川　「信用および信用制度」をお書きになっています。

杉本　そうですか。

細川　それから『新生』という雑誌に……。

杉本　あれは三宅晴輝さんに頼まれた。青山さんという永井荷風のファンだった人がはじめ，三宅さんは顧問をしていました。戦後総合雑誌の最初のものです。三宅さんに何か書けと言われたから，新円切替をめぐる日銀批判を書いたのです。私がまた三宅さんの全面代筆で書いた『インフレと財産税』というパンフレットが新生社から出た。経済時論のパンフレティーアリングですが，あとがつづかなかった。

細川　昭和23年から24年にかけて，インフレーション論を……。

杉本　あの頃は忙しくてね。そんなに本格的な勉強ができなかった。学会や研究会を組織したりして，要するに私はお膳立て要員みたいなもので，世話役ばかりやっていた。それから小椋広勝さんなんかと世界経済研究所開設に協力したこともあります。

あとは民科ですね。民科の経済部会の幹事をして雑誌の編集もやっていましたが，余り記憶に残っていません。

4　横浜国立大学時代

マルクス・エンゲルス選集飜訳など

細川　先生の横浜国大時代の前後から『マルクス・エンゲルス選集』，そして『マルクス・エンゲルス全集』と。

杉本　それにはいろんな経緯がありますが，大月の小林直衛さんとの関係を言っておきましょう。小林さんは山梨県の大月の人です。京大経済に学び，河上門下生です。私が東洋経済にいたときは，国際書房の洋書セールスマンで，鈴木重歳君を通じて知り合った。そのあと朝鮮理研金属工業の何かになっていました。終戦後引き揚げてきて，そのうち有楽町の毎日別館のバラックのようなとこで大月書店を旗上げされたんです。一番最初は『葦折れぬ』がベスト・セラーになった。この本のデザインをしたのが，私が学消時代からつき合った清和書店の清水兄弟の弟でした。戦前の清和書店は兄弟でやっており，堀江邑一さんが企画に関係してました。内田穣吉さんがエコノミストの記者をしていて資本主義論争を連載していましたが，それを本にしたのが清和書店で，校正段階でこの本の引用などの照合を手伝いました。学生時代の最後の頃です。出版されてから内田さん上京に際して堀江さんと３人でスエヒロで会いました。清水兄の正義は召集され，戦死しました。清水の弟は兵隊から帰ってきて，本郷通りで古本屋をやりながら大月の企画やデザインを手伝っていましたが，急病で亡くなりました。小林，清水とは戦前から知己だったので，そのうち大月の仕事に狩り出されることになりました。大月は有楽町から政経ビルに移転し，そこで『選集』をやりはじめ，その終り頃に本郷１丁目の今のところへ引越した。昭和26年秋ですよ，私はよく憶えているが，建てかけの事務所の畳一枚しかないところに寝かされて，小林さんが牛乳１本とリンゴ１個買ってきて，「これを食べ，徹夜で校正してくれ」と言われた。補巻の『経済学批判』のときで，私が横浜国大にいく直前です。それからあと東独の Dietz からマル・エンの Werke がでだした。小林さんは「これは是非うちでやらなきゃいかん」と言って，それで細川嘉六さんと大内兵衛先生とを監訳者に担ぎだし『全集』をやりました。編集会議を鎌倉の大内先生宅や千歳船橋の細川さんのところで開いたり，できるだけ広く分野別に訳者をえらぶなど相談しました。

細川　それと先生は渡辺佐平先生と関係があって，岩波の『日本資本主義講座』に……。

杉本　あれは宇佐美君から頼まれた。財政を担当した宇佐美君の関係で，渡辺さんや私などが金融を頼まれた。随分ヒァリングをやりましたよ。ヤミ金融とか，あのと

きは業界の人からも参加してもらって話を聞いた。

細川　それから信用理論研究会のことを。

杉本　信研ね。僕は金融学会にはじめは入らなかったんです。そのうち学会に出ていた渡辺（佐平）さん，岡橋（保）さんとか，飯田（繁）さんとか，麓（健一）さん，三宅（義夫）君などが交流するようになった。三宅君は大学は私より3年位あとで，第一銀行の行員でした。戦後私のところへも訪ねてきて，資本論などの研究会をいっしょにやった仲間です。そのうち第一銀行を辞め，立教大学へ入り，教師に転職しました。彼等が金融学会に出席する機会に自分たちで何かやろうとサロンのごときものとして信研を創ったんです。それで私にも呼び掛けがあった。最初は渡辺佐平さんの法政大学が事務局でした。講座『信用理論体系』は信研の最初の仕事です。いま信研の会員が驚くほど増えました。今度貨幣・信用論のガイドブックを有斐閣から出します。

細川　『リカード全集』の翻訳のことを……。

杉本　それは堀経夫先生の仕事です。大昔，50年以上前ですが，堀先生がイギリスに行ったときスラッファ（P. Sraffa）がケンブリジにいて，リカード全集を出すという話を聞き，邦訳の翻訳権を予約されたらしいのです。そのうち戦争になってさっぱり情報が入らなかった。戦後いよいよケンブリジ大学のプレスで出版されることになった。そしたら中野正君が戦争中岩波文庫でリカードの手紙数冊を出したこともあり，堀先生と相談して刊行計画をはじめたのです。中野君の知っている山本という印刷屋が山本書店をつくり，堀先生の還暦記念論文集をまず出したのです。それと同時に『リカード全集』もそこで出すというので，堀，中野連名で学士会館にわれわれを集めました。末永茂喜さん，鈴木鴻一郎さんとか，玉野井芳郎さんとかがきました。だけどこの本屋はながつづきせず，事業は中断されました。そこへ雄松堂がたまたま30周年かの記念事業として引き受けたいということでこの話にのった。でもそんな簡単に出来上る仕事じゃないんです。

細川　それで先生のご苦労が……。

杉本　そうです。丁度大学紛争にぶつかりましたし，私の担当の議会の演説証言集は特殊な記録ですから，なかなか厄介でした。ずいぶん遅れてしまいました。

細川　それで先生の翻訳は現在はメガが中心ですか。

杉本　メガね。『資本論草稿集』も大分できましたが，今『全集』の補巻をやっているんです。「リカード評注」の校訂をこの夏にしなければ。これは九大の深町（郁弥）君の訳が前の Grundrisse（『経済学批判要綱』第4分冊）に入っていたんですが，ロシア語版が出たので，参照する必要がある。

細川　先生は『レーニン全集』の方は。

杉本　僕はレーニンは全々ノー・タッチです。

細川　先生，ロシア語はいつ習われたんですか。

杉本　僕は昭和９年東大に入った年に，外語の講習会へロシア語を習いに行きました。あの頃ロシア語を習いに行くこと自体が大変です。それだけでも睨まれますが，いまの毎日新聞社のとこにあったバラックの東京外語へ通いました。だけど余りしょっちゅう読まないでしょう，忘れますね。ときどきやると思い出しますが，必要に応じてやる程度です。ソビエトを研究しているわけでない。ただマルクス・エンゲルス関係のロシア語文献を参照するときですね。

細川　このあたりで『資本論辞典』について。

杉本　岡崎次郎さんが河出書房から小さな新書版の『資本論小辞典』を出した。それをもとにして大きいのを出したかったが，その頃に河出の経営が困難になり，やれなくなった。この話を大島清君が岡崎さんに頼まれて青木書店へもっていった。青木でいろいろ条件が出され，編集委員に久留間（鮫造）先生，宇野（弘蔵）先生を入れ，私は辞典編集経験者として動員されることではじまりました。あれは大変だったですよ。原稿の書きなおし，１行の字数のやりくりなど，校正から体裁まで随分苦労しました。片瀬の公務員保養所で，久留間先生たちも泊り込んで一緒にやったこともありました。

横浜国立大学

細川　お話しが前後しましたが，最後に横浜国立大学へは。

杉本　先きに話したように私は戦後も調査マンで仕事しようと思っていましたが，結局どこにも職場がないわけです。友人，知人は私より早くどんどん教師になったが，自分は教師に向かないと思っていた。横浜国大へ行ったというのは，たまたま今住んでいる片瀬に移ったからです。この家は震災前に父が買っておいた土地があったからそこに建てたんです。朝鮮戦争が始まり，また疎開騒ぎのうわさなども流れ，東京脱出の気になって，昭和25年住宅金融公庫の第１回融資を受け，ここに15坪の家を建てました。そして半年ばかりぶらぶらしていたら，長洲君がやってきて，横浜国大の定員を早く埋めなければならぬから来てくれといった。僕も神奈川県住民になったから地元にサービスしなければと思ったし，東海大学でしばらく教師の見習もやったのでやれないことはないと思って，昭和26年11月に国大につとめました。

宮地　先生の横浜国大での図書資料，とくに研究資料室から……。

杉本　横浜国大へいって驚いたのは，学部が分散していたでしょう。経済学部分館へいってみたら，横浜高商時代のものが少しあるけれども，戦後の雑誌なんかほとんどないんです。とくに外国雑誌がない。図書資料の収集方針も，予算制度も確立していなかった。年度の途中に赴任したので，授業はやらずにそれらを再建，充実するた

めに働きました。その後も私は教師としての時間以上に，そんなことに多くの時間を使ってきました。

それで経済資料協議会に国大が参加するのは最初水田君が長洲君に話をしたのです。長洲君が私に，こういうものができたらしいからどうでしようと言ってきました。それで研究資料室を創り，そこで分館から雑誌を集中し，予算をとって資料を集めました。この研究資料室にもう一つ国際経済研究所という看板をかけ，その運営資金を同窓会や学生から集めました。それで雑誌資料を補充しました。

宮地　昭和39年から附属図書館長をおやりになってますね。

杉本　その前に分館長をやっていましたが，1年やって途中から館長をやったんですが。館長というのは学部間の盥回しで，任期2年間やるのです。当時は統合計画も決まらず，図書館は等閑視されていましたから，学内ではなにもできませんでした。

第2部　細谷新治先生

1　東京商科大学入学まで

渋田　それでは杉本先生には聞き手に回っていただき細谷先生との座談会に入ります。はじめに東京商科大学の学生時代を中心に話していただき，つぎは法政大学商学校の教諭時代，最後に戦後の一橋大学時代，以上の3つの時期にわけてお話をうかがいます。一橋大学時代が中心になると思いますが，ではよろしくお願いします。

細谷　僕が東京商大に入学したのは1934（昭和9）年です。中学は府立第一中学校（今の都立日比谷高校）で，1930（昭和5）年に入学したんです。生まれたのは1917（大正6）年で，大井町の時計屋の息子です。親爺がこの土地に店をもったのは1907（明治40）年，日露戦争のすぐあとの景気のいい頃だったようです。店から5分位のところに伊藤博文侯のお邸がありましてね，親爺はそこの出入りの時計屋だったようです。伊藤さんは1909（明治42）年に韓国統監を辞任した直後にハルピンで暗殺され，お葬式が大井町であったんです。今でも大井に伊藤さんのお墓があり，その地名の伊藤町というのが残ってます。桂太郎首相のお妾のお鯉さんの家も家の裏の方にあったそうですね。小学校は山中小学校というんです。さっき杉本先生のお話をうかがってびっくりしたんですが，先生は大井町の第一小学校で，山中小学校というのはそこから歩いて10分かからないすぐ隣りです。山中小学校は第一小学校に対して第二小学校といっていましたね。小学校6年生のときに，親爺は時計屋をつがせるために高等科へやらせようと思ったんですが，担任の小原先生という先生が親爺を説得して中学をうけることができたんです。それで府立高等学校をうけたんですがおっこちちゃっ

たんで一中へ入ったんです。

一中で友達になったのは，第一小学校から入った大塚竹松と北条誠で，大塚は東京商大にも一緒に入り，一番の親友でしたが海軍に召集され，ラバウル沖で戦死しました。北条は早稲田大学へ入り，後に作家となったが彼も亡くなりました。二年後に入ったのが水田洋です。この頃の一中は，水田洋の『ある精神の軌跡』や，僕の一年後に入った加藤周一の『羊の歌』にあるように一高の受験予備校という色彩が強かった。

渋田　では，先生はなぜ東京商大へ進学することを決められたのか，そこいらをひとつ話してくれませんか。

細谷　その理由は簡単ですよ。一中には一高，東大を目指す秀才がたくさんいて，とても僕なんかだめだろうと思ったことと，一高へ入ってもまたもう一度入試があるでしょう。商大予科へ入れば本科へ上るとき試験がない。それで楽な方を選んだというだけです。当時は4年修了で上級学校へいけたんです。それで四年の時に予科を受けたら偶然入っちゃったんです。もっとも先程いいましたように，一中は3年生のときから受験体制でしたから，生徒は学校にいってさえいれば自然に合格する位の力をつけてたんでしょうね。とにかく僕らの入った1934（昭和9）年は，何十人も一中から商大へ入ったですよ。

杉本　当時，商大は本科の定員と予科の定員とは差があったの。

細谷　予科は5クラスで約200人位でした。あと商大には専門部と教員養成所があって，そこから本科へくるには試験があるんです。それと全国の高商から入試をうけて入った学生がいて，それを全部合計すると100人位です。ですから本科1年生は約300人位でした。

杉本　一高から東大のコースと，商大の予科から本科へのコースの2つは，人文・社会科学の中では，1，2位のランクですね。

細谷　ええ，ただわたしが商大に入ったのは，別に経済学をやろうというんではなくて楽な道を選んだだけですよ。それともうひとつの理由は，商大へ入ればいやな数学がないだろうということでした。何しろ矢代先生の受験代数で徹底的にイタメつけられましたから。北条と一緒に白紙の答案を出したことがありますよ。ところがおかしなことに幾何はあるときひょっと受験数学雑誌を読んで好きになったんです。それから岩切清二の幾何学の受験参考書なんか読んで幾何には自信がありました。

杉本　私の時は受験の数学書では，秋山武太郎の『解る幾何学』という本があった。

当時のベストセラーでした。

細谷　英語では，山崎とか小野圭の参考書がベストセラーでしたね。僕もこれは読みました。

渋田　中学の英語はどうでした。

細谷　これはさっきいったように，一中の英語の先生の水準というのはやはり相当高かったんでしょうね。それで自然に僕たちも英語の力がついていたんじゃないですか。それで思い出したんですが，僕は2年生の時に学内の英語スピーチ・コンテストで優勝したことがあるんです。

杉本　あの頃は，イギリスのジョーンズのフォネティック・サインができて輸入された時ですね。

細川　当時，英語の辞書ではどんなのを使っていました？

杉本　例の岡倉由三郎の『新英和辞典』（研究社）でしたね。それと市川三喜の『大英和辞典』（富山房）もありましたね。

2　東京商科大学時代

渋田　それではこの辺で商大予科の話に入りましょうか。

細谷　予科に入ったのは1934（昭和9）年です。予科は，そのころはもう石神井から今の小平へ移っていました。あの頃新宿発浅川行は30分に1本で，また国分寺から出る多摩湖線も1時間に何本もなかったですね。ただ僕は予科3年間ほとんど国分寺から予科まで往復歩いて通いましたよ。そうすると当時は国分寺から学校までずっと麦畑でね，その向うに秩父の武甲山からはじまる秩父連峰や，大菩薩峠，富士山が全部見えるんです。夏の夕日の沈む頃とか，冬の雪を冠った時とかは，素適だった。僕が山を歩くようになったのはこの3年間の通学の影響ですよ。予科のクラス編成は第二外国語で分けたんです。5組がフランス語であとの4組はドイツ語志望です。わたしはドイツ語で2組でした。1年生のときの担任は東大からきたばかりの西川正身先生でした。この先生にはトマス・ハーディーの『テス』を教わった。英語の先生はそのほかに新里文八郎，阿久津謙二とか，外人教師でA・タイスリッジ（A. C. Tytheridge），T・ジョーンズ（T. Johnes），ラッソー（P. A. V. Russo）などの名前を思い出しますが，中でも一番記憶に残っているのは，中村為治先生の旧約聖書の授業です。この先生はロバート・バーンズの詩集の翻訳をやった人です。大学を辞めてから乗鞍岳の山麓に家をたてて仙人のようなくらしをしてルーサー・バーバンクの植物学の古典の翻訳などを岩波文庫で出したり悠々とくらしていますね。

ドイツ語は2年生のときに吹田順助先生からF．テニースの『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』を教わったが，これはちょっと歯がたたなかった。先生は稀代の呑

んべえだということは知っていたが，ドイツ思想史の大家であり，名エッセイストと知ったのはずっとあとになってからです。それから三浦新七先生のお弟子さんでドイツから帰ったばかりの町田実秀先生に教わった。この人は発音をやかましく教えてくれました。これは今でも感謝しています。それよりも3年になって太田可夫先生から教わったヘッセの『ペーター・カーメンツィント』は実に面白かった。スイス・アルプスの描写からはじまる冒頭の一ページは長いこと暗記してました。それからヘッセの書物をドイツ語で何冊か読んだり，ハンス・カロッサやケラーなどを読んだもんです。太田先生を僕らはベクさんといっていましたが，もともとは哲学の先生で予科でも哲学を教えていました。これがまた，子規の「かめにさす藤に花戻短かければ畳に上に届かざりけり」がいかに名歌であるかを講義するという調子でね。実にユニークな先生でしたね。それから講義で今でも記憶に残っているのは幸田成友の西洋史，杉山三郊の漢文などです。幸田さんは露伴の弟です。

杉本　大阪市史の編纂をしたね。

細谷　ええ，江戸と大阪の歴史にも強いんですが，日本とオランダの交渉史をやってましてね，実に本の好きな先生で，教室にオランダ語の本をもってきて，それを買った苦心談をさかんに話してくれました。僕はこの人の書物随筆をおかげでいくつか読みました。『風呂敷・番傘・書物』なんか。僕が外国の古書に興味をもったのは，この先生の影響があると思いますよ。ただ幸田さんの書誌学を読んだのはずっと後になってからです。杉山先生には習字と漢文を教わった。その頃はまだ習字があったんですよ。この先生はいつも着物で，教科書に『古文真宝』を使ったんですが，時々ボールドにチョークで漢文をたん念に書くんですが，これがすばらしい字で，そのすぐあとが確かベクさんの哲学で，ベクさんがそれを見て，うーん見事なものだ，消すのは惜しい，といって消さなかったことを覚えています。これもあとで知ったんですが，この先生は陸奥外相の秘書だった人ですね。明治から昭和にかけての屈指の書道家でした。それから白票事件の後の大学改革の一環としてだったと思うんですが，三浦新七前学長が予科で授業をやったんです。題目は修身という名前だったと思いますが，授業の内容はさっぱり覚えていないんですが，白髪の立派な風貌で，僕にとってははじめて見る大学者だったですね。当時貴族院議員で日銀の顧問をしていたんです。それは日銀の総裁が結城豊太郎で，三浦先生とは山形一中の同期生で親友だったからです。三浦さんは山形市の出身ですが，結城さんは赤湯，今の南陽市の出身で，今南陽市に結城さんの文庫がありますよ。

杉本　結城文庫というのがあるの？　そうすると，そこに19世紀の地金論争のパンフレットがあるはずですよ。

細谷　私も結城文庫を見学しましたが，相当の金融・財政関係の洋書があったから，

そういうものもあるかも知れませんね。ただ，結城文庫は山形県立図書館にもあるようだからどっちにありますかね。それから貴重だと思ったのは，結城さんは郷土の子弟の教育に熱心だった人で，それでこの文庫があるわけですが，明治，大正時代の教科書が実にたくさんありました。それと金融・財政関係の官庁刊行物がたくさんあります。

渋田　予科では専門科目はあまりなかったんですか？

細谷　いや，中山伊知郎先生の経済原論や村松恒一郎先生の経済史をききましたよ。中山さんは『純粋経済学』を書いた後ですね。簿記は1年で岩田先生の商業簿記，2年で太田哲三先生の銀行簿記，3年で金田先生の工業簿記を習いました。商業算術も算盤もありました。それから英書講読で高島善哉先生がミルの『経済学原理』をやりました。一章ずつ報告させてそれを高島さんが講評するというやり方でした。僕が経済学の原書をまともに読んだ最初でしょう。もっとも全部は読まなかったですが。ただ，このおかげでミルの『自伝』だけは読みました。しかし僕は予科の2年生までは専ら岩波文庫でトルストイ，ドストエフスキイを読んだり，ジイド，ロマン・ロランなど翻訳小説ばかり読んでいて経済学を勉強しようとは思わなかった。経済学に興味をもったきっかけは，河上肇の『貧乏物語』と『資本主義経済学の史的発展』を読んでからです。それから河上さんの書物をせっせと集めて読んだんです。しかし僕がひかれたのは河上さんのマルクス経済学というよりもヒューマニズムの方でしょうね。

杉本　あの中にでてくるラスキンとかミルなんかね。

細谷　ええ，それからウィリアム・モリスなんかにもひかれました。

杉本　ラスキンはね，真珠の御木本の息子の隆造が河上さんの所へ行って勉強し，それから東京へきて，銀座ラスキン何とかいう喫茶店をつくったんです。高級なイギリスの紅茶を飲ませるんですよ。そこに行くとラスキンの手紙とか絵があるんです。

細川　『ラスキン叢書』を出したとか。

杉本　ええ，出しましたね。当時の喫茶店のメニューを私は持ってますよ。少々高かったですが，そこへ行くとイギリスから輸入したハンカチなんかくれたりしてね。彼はあれですっかり財産をつぶしちゃった。

細谷　ラスキンの叢書は隆造の娘さんがまだ大事にもってますね。生かす道があれば公開してもいいという新聞記事が出ましたね。まあ僕の経済学も予科時代はそんなもんです。マルクス主義に少しでも惹かれたのは，経済学者の本ではなくて，島木健作の『第一義の道』，『黎明』とか，小林多喜二などのプロレタリア文学の影響の方が強かった。

渋田　予科ではマルクス経済学はなかったんですか？

細谷　なかったですね。僕の時は中山先生で，その前は多分，杉村広蔵先生じゃあないですか。大塚金之助は，僕の入学する一年前の昭和８年の正月に捕ったんですが，予科の原論は昭和３年までしかやってません。大塚金之助の名前は予科でも知ってはいました。しかし予科では僕は先生の書いたものを読んだことはないんです。それより山田盛太郎の『分析』とか平野義太郎の『機構』なんかを読んでいた。先生が一橋新聞に書いたエッセイを読んだのは，僕が本科へ入った年の1937（昭和12）年の２月15日号の紙屑箱という欄にのった「ハーバード大学三百年祭」がはじめてです。当時の新聞部は，石川滋，山田秀雄がリーダーで水田洋もいました。大塚先生の原稿をとりにいっていたのは山秀だそうです。しかし，僕は学生の頃はこの３人とは全然つきあいはなかったですね。

渋田　それでは本科に入ってからの話をうかがいましようか。

細谷　1937（昭和12）年に本科に入ったんですが，ゼミは労働法の孫田秀春先生でした。どうして法律のゼミへ入ったかというと，予科３年のときにクラス担任の町田実秀先生に相談したら，先生がちょうどドイツから帰ったばかりの労働法の孫田先生をしきりに推薦するので結局入っちゃったんです。この先生は昔ベルリン大学留学時代に大塚先生に協力して，メンガー文庫購入に働いた先生です。ところが僕がゼミに入った時はすごいナチスびい気になってました。結局ゼミの一年が終った頃，文部省へ転出してしまって僕はノーゼミになった。

それで２年になって高橋泰蔵先生のゼミに入ったんです。ちようど先生がはじめてゼミをとった時で，２年には山代洋（故人），長沢惟恭，タイの留学生でワラワン殿下の弟のチャンタナカラ・ワラワン君，それと僕の４人，石川滋は１年に入ったんです。ゼミでは，１，２年合同でストックホルム学派の創始者，ヴィクセル（K. Wicksell）の“Geldzins und Güterpreise”の邦訳『金利と物価』（豊崎稔訳）を読みました。サブ・テキストにヴィクセルの“Vorlesungen über Nationalökonomie……”の邦訳を読まされました。ちょうど高橋先生が貨幣的景気理論を研究していた時代です。僕はそれから，ハイエクの“Preise und Produktion”とか“Geldtheorie und Konjuktürtheorie”とかも読み，シュンペーター，ヴィーザー，ベーム・バヴェルクと段々さかのぼってメンガーの『経済学原理』にたどりついたんです。しかし僕はメンガーの方法論争を知らず，メンガー文庫も商大にあることは知ってましたが，猫に小判でした。しかし高橋先生のゼミナールで僕ははじめて学問研究のきびしさや，楽しさを教わったようです。ゼミの合間には井の頭公園の裏手の高台にある先生の家へよく押しかけて遊んだり，山代や長沢と新宿のムーラン・ルージュに行って明日待子をみたりしました。長沢は高橋先生の講座のあとを継ぎ，一橋を停年でやめて今，城西大学へ行っています。山代洋は一橋では伝説的な人物でね，彼とか船越経三，岡

田丈夫，平井潔，なんかが一橋学会のリーダーだった。この一橋学会は学生のつくった学術研究会です。当時1939（昭和14）年1月に一橋学会の弾圧があって山代は検挙されたんです。翌年執行猶予で出てきましたが，太平洋戦争で召集され，フィリッピンで戦死しました。僕がゼミナールでもっとも影響をうけたのは，高橋先生は別にして，この山代と長沢の二人です。

3年になって卒論を書くことになり，先生からマーシャルの弟子でケインズの同僚であったロバートソン（D. H. Robertson）の“Banking Policy and the Price Level”をやらされました。マーシャルの『経済学原理』を読んだのはこの頃で，僕は大塚先生をマルクス経済学者というより，マーシャルの翻訳者として先に知ったようです。これをやっているうちに，八ケ岳へ登って赤岳の帰りに夕立に会ったのが原因で肺結核になり，おかげで卒業を1年延ばすはめとなったんです。1941（昭和16）年5月に卒論『D. H. ロバートソン「銀行政策と物価水準」の一研究』を出してやっと卒業しました。あの頃は5月卒業なんてことをやってくれたいい時代でした。卒論でさんざん苦労して近経はこりごりといった気持に最後にはなりましたが，とにかく近経の一通りの勉強ができました。ケインズの『貨幣論』を読んだのも本科に入ってからです。ただケインズの“General Theory”は1936年に出たんですが僕はとうとう読まなかった。

渋田　学部の講義で印象に残っているのはどんな講義ですか。

細谷　講義はあまり出なかったですが，ちょうど本科1年の時に杉本栄一先生の経済原論第二講義と高島先生の経済学史，高橋先生の貨幣論が開講された時でした。これはどれも面白かった。高島先生はそのころはリスト（F. List）をやってまして実に迫力がありました。それから三浦先生も講師で文明史を講義してましてね，僕は3年間続けて先生の講義をききました。僕はノートをとったことがないので今どんな講義をされたか忘れましたが，記憶に残っているのはドイツ近代思想史の講義です。カント，ゲーテ，シラー，レッシンク，ヘルダー等。先生はドイツの高級葉巻をいつも口からはなさなかったですが，教壇に立たれると内ポケットからメモ用紙を出してそれで講義をされるんです。先生は生前殆んど著作を残さなかった人ですが，亡くなってみたらそのメモが1万枚以上残っていました。これを戦後になって高橋先生がテーマ別に整理されて山形大学と三浦家へ寄贈されたんです。その原本は一橋の図書館にありますよ。これを整理して著作集を出せるといいんですがね。

3　法政大学商業学校時代

渋田　それではこれから先生が卒業されて一橋大学へ就職される迄の時期の話をうかがいましょうか。

細谷　僕は1941年の３月に卒業できなくて５月に卒業したんですが，相変らず結核が直らずブラブラしてました。就職試験も日本鉱業とか理研とか受けたんですが胸でおっこちて最後に第一生命にひろってもらったんです。しかし結局身体が直らず一日も出社しないで辞めました。それから大学の大庭一郎という事務官に紹介されて明治学院大学にも決ったんですが，これも身体に自信がなく後から断わり，最後に法政大学の商業学校に入ったんです。1942（昭和17）年の９月でした。その時分ったのは，ちょうど今，専修大学学長の高橋長太郎先生がお辞めになったその後任だったんですね。

法政では商業簿記，商業算術を教えていましたが，そのうち同僚がどんどん召集されてその穴埋めに英語から東洋史，西洋史までやらされました。もっとも段々戦争がひどくなって生徒は区役所へ行って家の間引きの手伝いをしたり，赤羽の工廠へ行って兵器の梱包の 手伝いをしたりで ほとんど 授業はなかったですね。そのうちに僕も1944（昭和19）年の春召集され，３ヶ月程，六本木の東部六部隊へ入ってましたが，また結核が出て帰されたんです。それで一応法政へ戻りましたが，どうも学生時代に接した学問的ふんい気を忘れることができない。そこで高橋先生に相談したところが，当時商大の東亜経済研究所の所員はほとんど南方のシンガポールへいっていまして留守部隊がいないから，資料部へ入って本の整理をしてくれないかということでした。それで研究所に入ったんですが，その時はもう戦争は終っていました。僕が入ったのは９月30日です。

4　東京商科大学（一橋大学）経済研究所時代

東亜経済研究所から東京商科大学経済研究所

杉本　戦後の東亜経済研究所の時の身分はどうだったの。

細谷　当時の研究所は官制になってまして官制の教官が８人いたんですが，その他に東京商科大学奨学財団というのがあって，この資金による職員が24人もいたんです。僕も財団職員で資料部へ入ったんですが調査員という身分でした。調査員はこの他に宇津木正，河合幹夫の２人でこの３人は仕事では技術員といっていたんです。研究職で調査員の身分の人もいましたよ。服部一馬とかその他数人いました。宇津木さんと河合さんはまだ南方から帰ってこなかった。ところが資料部の書庫へ入っておどろいたことには全く何の整理もできてなくてひどい状態でした。僕は胸が悪いので本の番人なら力もいらないからと 思って入ったんですが，これは 全くあてが はずれましたね，1945年から46年にかけてはそんなことで本の整理にあけくれました。その頃の資料部の室の隣りが三浦先生の大きな研究室で，先生はいつも僕の部屋を通って研究室へ入るんです。ある時，「君は山形だそうだな」といわれたことを記憶しています。

僕の母親が天童出身なんで感違いしたんですね。ドアがあけっぱなしでしてね，よく本を整理している姿が見えるんですが，ある時歌を歌ってるんでよくきくとそれが松井須摩子が歌って，明治の最初の流行歌といわれた「カチューシャ可愛いや」なんですね。それを口ずさみながら楽しそうに本をあっちへやったりこっちへやったりしている。やはり明治の学者だと思いました。

渋田　大塚先生が経済研究所の所長になられたのはいつ頃ですか。

細谷　1947（昭和22）年の3月です。先生は1945（昭和20）年の12月に学校へ戻られたんですが，翌年に上原専録先生（故人）と大塚先生が学長候補となり，結局上原先生が学長になったんです。大塚先生を所長に選んだのは，所長選考委員会ですが，その就任の説得には上原学長があたったんです。大塚先生は結局上原さんにこん負けして所長になったんですが，後になっていつもあれは僕の一生の失敗だといつもいってましたよ。なぜ先生が所長になったかというと，当時の研究所員は大半が財団の職員だったでしょう。その他に財団の事務職員もいました。それが財団のファンドが満鉄とか植民地の会社の株や社債だったので敗戦で一挙にとんじゃったんです。

1946年には続々南方から職員が帰ってきましたので財団の財源は急速に悪化してきた。それとインフレもひどかった。そのために財団は研究所への援助を大幅にカットしてきた。これでは大勢の職員の給料が払えない。もう一つの理由は戦争に協力した研究所の改革ということです。この大事業をやれるのは大塚先生しかいないということで上原学長は先生を説得したんです。この経過は，『大塚金之助著作集』の第5巻の月報に当時の研究所の所員の長老格で大塚所長を助けた津田隆（前茨城大学教授）さんが書かれています。結局殆んどの研究員が辞めて研究所は再発足したんです。その間に上原学長は1949年1月に学長を辞め，大塚先生も2月に所長を辞め，中山伊知郎先生が学長兼研究所長になりました。

大塚金之助先生

渋田　細谷先生が大塚先生からライブラリアンの勉強の指導をうけたのはいつ頃からですか。

細谷　僕はその頃日誌をつけてましたんで，それを見ますと1948年の1月頃からですね。それから僕は今『大塚金之助著作集』の編集をしているんで先生の残された記録を見ているんですが，たまたま僕の指導記録が残っていました。それと僕の日誌とつき合せてその頃のことを段々思い出したんです。1月30日に先生に呼ばれていくと，「あなたはこれを読みなさい」といって渡されたのが，グレー（A. K. Gray）の "Benjamin Franklin Library" という本でした。その時に先生は僕に「君はブックマンになりたまえ」と言われたんです。その時はブックマンという言葉の意味がよく分らなかった。変な和製英語かと思っていましたが，ずっとあとになってイギリス

に行ってはじめて分った。ちゃんとブックマンという言葉がありました。ライブラリアンという意味も含みますが，もっと意味が広く，書物愛好家も含むんですね。先生が僕にブックマンになれといったのは，ライブラリアンよりもっと高級な書物人になれと要求したんでしょうね。そのつぎに渡されたのが，ツェ・チェン・タイという人の "Professional Education for Librarianship" という本でした。

全員　中国人ですか。

細谷　ええ，ニューヨーク州立図書館学校を卒業して北京の国立師範大学附属図書館学校の校長なんかした人ですね。この本を読んだことを僕は今まで全く忘れていた。先生の記録を見てあわてて僕の記録を探したら当時の読書ノートが出てきました。ちゃんと読んでいました。大塚先生の記録を見ると，「3月17日（木）タイの書物をよみおわる。二十六日目である。」と書いてある（笑）。それから3月19日にA．エスデイルの "A Students Manual of Bibliography, 1931." と衛藤利夫の『短檠』を借りています。衛藤さんは，満州へ行って奉天図書館から大連図書館へ移り，戦後日本へ帰ってきて初代の日本図書館協会の理事長をつとめた方ですね。大塚先生と知り合いだったようで吉祥寺のお宅へも行ってます。先生は衛藤さんをたいへん評価していました。この二人の関係をもう少しきいておけばよかったと今になって思います。エスデイルは先生の4月28日（水）の日付けのところに，「Esdaile かえる。貸してから四十日目。」と書いてあります。とにかく先生から本を借りた人は皆こういう具合だった。杉本栄一先生もワルラスやパレートを大塚先生から借りたことがあるそうですが，「君，大塚先生はね，2週間位たつと，あれはもうお読みになりましたかと電話がかかってくるんだよ。ワルラスを2週間じゃあ無理だよ。先生からとても本は借りられない。」といっていましたよ。それから3月頃から McCulloch, Higgs, Bateson のビブや，メンガー文庫の目録，Bonar のやったスミスの蔵書目録，"Vanderblue Memorial Collection of Smithiana." などをつぎからつぎへと見せられました。

渋田　大塚先生が細谷先生にブックマンになれといったのは，何か理由があったんですか。

細谷　さあ，はっきり分らないんですが，ひとつこういうことがあるんじゃないでしょうか。それは今度先生の『著作集』を編集していたら，敗戦直前に書いた「世界大戦図書館（私案）」という未発表の手稿が出てきた。これは先生が戦争中，生活に困って三井物産のために洋書の翻訳や紹介をやったことがあるんです。そのために先生は当時容易に見られない外国書をたくさん読んでナチスの敗戦をかなり正確に予想できたようです。それで世界が二度とこんな戦争をおこさないようにと，この世界大戦図書館の構想をたてたんでしょう。資金は物産から出るというあてもあったようで

す。しかし，この構想は結局実現しませんでした。この手稿は『著作集』の第5巻に入れましたのでぜひ見て下さい。実に面白いですよ。先生の面目躍如たるもんです。そのなかのライブラリアンの資格の所を見ますとね，「幹部は海外を出た人で構成する（男女とも），幹部の後継者は少くとも三年欧米に留学させる，図書館学専門の人も留学させる，単なる事務員ではなく研究的な人を求む（生涯的な研究――その研究において他に比肩なきこと――どんな小さな研究でもよい」などと書いているんです。

所が先生が所長になってから，1948年2月25日の日付けのある「集書方針」という半ペラ18枚のメモを僕にわたされたんですが，それを見ると「世界大戦図書館」の構想がそっくり生きているんです。だから先生は当然，研究所のライブラリアンにも同じような水準の人を望んでいたんでしょう。それで先生は宇津木さんと僕をそういうライブラリアンにしたてようと思ったんじゃあないでしょうか。ちょうど先生は研究所の改革でくたくたになっていた時ですが，よく資料部へきて僕は資料部長ですなんていって夜おそく迄本の話をされてました。僕が『図書館学・書誌学文献目録』という半ペラで151枚のビブをつくって先生に出したのが1948年12月です。

渋田　これは先生が自分の勉強のためにつくられたんですか。

細谷　ええそうです。一年かけて――。まあ一年の勉強の成果であり，今後の勉強の計画書のつもりでした。大塚先生はこれを見て，これじゃあ漠然としている。このリストはこれから資料部へくる若い人の勉強の基準のリストにするように具体的に何を最初にやったらよいか，次は何と，勉強の段階を追った計画リストにしなさいといわれました。それから最大の欠陥は中国がないことですといわれました。僕が今の若い人に中国と朝鮮の図書館学をやんなさいというのは，この時の先生の言葉のせいなんです。自分でできないもんですからね。

宮地　細谷先生がロシア語を勉強されたのはこの頃ですか。

細谷　そうですね。1949年頃からロシア語の本が段々入ってきたんで，金子幸彦先生のロシア語の講義に出てゲルツェンの「三つの死」とか，短編なんかを勉強しました。しかし，最後迄出たかちょっと記憶にないんです。むづかしくて落ごしたんじゃあないんでしょうか。ただおかげで金子先生のゼミナリステンと知りあってロシア社会思想史の勉強をさせてもらいました。これは今でも続いていますよ。

宮地　僕が経済研究所の資料部に入った時，ライブラリアンは英・独・仏語は当然としてもう一ケ国語，ロシア語ができなければいけないと大塚先生がいわれたと聞いたんですが。

細谷　それはね。僕は予科で町田先生からドイツ語の発音で随分しぼられたんで割にドイツ語をうまく発音するんです。それで大塚先生は「君はドイツ語がなかなかいける」といいましてね，実際はさっぱり本なんか読めないんですが，その時にこうい

うことをいわれた。「英語は読み・書き・しゃべれること，仏語は読み・書けること，ドイツ語は読めるだけでよい，その他にロシア語が読めるとよい。」と，こういわれたんです。つまり最低4ケ国語は読めなくちゃあだめだということです。

1949年になって先生から何かテーマをもって勉強しなさいといわれて僕は「英国資本主義発達史・書誌の書誌作成の計画について」という半ペラで8枚のメモを出したんです。そうしたら先生は，これはテーマが大きすぎる，もう少ししぼったらどうかといわれました。「例えば産業革命史はどうでしょう。この学校には上田貞次郎先生の『産業革命史』という名著があるのに，この伝統を継ぐ人がいない。あなたは産業革命史のビブをつくりなさい。」といわれましたよ。しかし僕は結局これをやりませんでした。

経済研究所図書収集のこと

渋田　先生が研究所の本を集めだしたのはいつ頃からですか。

細谷　大塚先生の収書方針の出た1948年の2月頃からぼつぼつはじまったんです。いま思い出すのは外交史の研究家の米田実の旧蔵書の話がありました。これは大平善悟先生（一橋大学名誉教授）からの引きあいですが，書物が約7,500冊，雑誌4千タイトルで値段は40万円でした。池袋と田無の2ケ所にあるというんで，大塚先生と僕は3月20日に見に行ったりしましたが，そのときは行き違いでだめになり，その後色々あって結局10月に入ってから買わないことに決ったんです。それからもうひとつは高野岩三郎先生の旧蔵書です。これは当時所員だった松川七郎先生からの話で，松川さんの先生の大内兵衛先生からの依頼のようでした。しかし，これは大塚先生の所でとまり，僕らは知りませんでした。今残された48年2月10日の先生メモを見ると，「丸善に値段を評価させ，この交渉は松川氏にねがう，金策困難だが，できたら正式に大内氏に所長が交渉する。」などと書いてあります。しかし，これはそののち大内先生が先生の指導していた統計研究所で買うことにしたため一橋は高野文庫を買うチャンスを逃しました。今になってみると残念ですね。

それから大塚先生は1949年2月に所長を辞め，中山学長が兼任所長となりました。それで都留先生はもう大分前から大塚先生の要請で研究所に入ったんですが，その後，小原敬士，高橋長太郎，野々村一雄などの諸先生がつぎつぎと入られて，山田勇（亜細亜大学教授），松川七郎，山田秀雄，大野精三郎などの残留組と合流して1949年5月頃に新研究所体制ができたんです。僕が研究所の助手になったのも5月です。本の収集は，大塚所長時代にも先生の収集方針に従って少しずつ古本を買いはじめていました。48年には時々先生のおともをして神田の古本屋を歩きました。それで先生の本の探し方，買い方などを実地に勉強しました。先生のいわれた「本というものは古本屋から古本屋へ歩く道が決っている」なんていう言葉は，今でも覚えています。帰り

によく映画館に入ったり，浅草の菊水というもつ焼き屋で一杯飲んだり，木馬館に入ったり，楽しかったですね。あの頃は神田に学者の売り喰いの本がどっと出た時代です。

杉本　旧大名とか華族とか，昔ヨーロッパへ行ってなんでもかんでも買った人達が金に困ってワッと売ったんだよ。

細谷　49年に都留さんが所長になって資料部の収書方針が変りました。ひとつは研究部門に国民所得部門ができたもんですから，国民所得の書物，それに関連した近代経済学の書物を集めることになったんです。国民所得については，その頃都留所長が国際国民所得学会でつくっていた国民所得のビブの日本の部を担当していたものですから，宇津木さんと僕でその仕度をやらされました。それから野々村先生がソ連研究をもることになったんですがロシア語の本が全然ないんでこれを集めるということになったんです。

杉本　その頃，ナウカはもう輸入をはじめていたの。

細谷　まだだったんでしょう。洋書の輸入の正式の再開は1949年の２月だったと思います。ですから本格的に研究所に外国書が入ってきたのは49年からですね。ロシア語の書物のシンになったのは旧東亜研究所の蔵書です。神田駿河台の明治大学の手前，山の上ホテルへ曲る角のビルに東研の留守部隊の人，小林義雄さんや秦玄龍さんがいました。

杉本　大原社研の本がまだそこにあったでしょう。

細谷　それはちょっと記憶していません。これははじめ野々村先生が話をつけ，値段は確か15万円でした。当時としてもこれは安かったですね。今だったら何千万でしょうね。その頃，大形孝平さんという人からもロシア語の本を買いました。これも野々村先生のお世話です。

杉本　満鉄のモスコー駐在の方でしょう。

細谷　その方がモスコーから持って帰ったんですかね。どうして持ってこられたんでしょうね。これが戦後のソヴェートの本が研究所入った最初です。

宮地　「かいえん」とかいう本屋が資料部へ出入りしてましたね。

杉本　海の燕だよ。

細谷　あの人は山本さんといってね，杉ノ原瞬一先生の下で北支慣行調査をやった人です。代々木の駅前に店を出したんです。

杉本　あの人は外地から本を持って帰ったの。

細谷　さあ，それは知りませんが，外地の同僚が売喰いであそこへ本をもっていったんじゃないですか。とに角いいロシア語の本がありましたね。それから８月になって内田丈夫さん（この人は河上さんのお弟子さんですが）からレーニンとスターリン

の全集を買ったり，ナウカの社長の大竹博吉さんからも少し買いました。まあこんなことで研究所のロシア語のコレクションの骨格ができたんです。それから紀伊国屋の洋書部は外地からひきあげた中島さんとか相良さん，丸善からきた大滝栄一さんなんかではじめたんですが，最初の頃は僕も洋書の選択のお手伝いなんか少ししましたね。そんな縁であそこのＰＲ雑誌の『机』に「英国社会経済思想史の書物案内」というビブを連載したんです。1952年の２月号（３巻２号）からです。ところが何回連載したか僕の手許に殆んど『机』がないので分らない。20回近かったと思います。

杉本　『机』は1950年に創刊したんかなあ，僕も三越洋書部のアナウンスメントを持ってますよ。この『The Piper』です。これは当時ナンバーも日付も書いてないんです。３号目か４号目かに1931年 September とかありますね。これでさかのぼっていくと，1931年頃から三越は洋書をやり出したんですね。最後が1942年１月で，これが戦前の『Piper』の終りです。

細谷　その『Piper』の名前ははじめききました。大塚先生も戦前の三越の洋書部へよくいってたようです。

杉本　三越には MEGA なんかもあったのです。昭和13, 4年頃，MEGA の往復書簡で箱入りで50円しましたよ。売れないで残ってたんでしょうね。Ｇ・マイヤーのエンゲルス伝なんかもあったんです。三越洋書部は穴だったんですね。

渋田　当時の『机』にはかなり図書館関係者の記事がのっていますね。この頃書店のＰＲ雑誌はこれ位だったんですか。

細谷　さあ，『学鐙』がいつ頃復活しましたかね。他にはなかったでしょうね。『机』には天野敬太郎，馬場重徳さんなんか書いていますね。毎月しゃれた表紙でした。詩人の北園克衛さんの編集で表紙のデザインも自分でやったんですね。

図書館職員養成所，ドキュメンテイション講座などのこと

宮地　先生が文部省の図書館職員養成所へ行き出したのはいつ頃からですか。

細谷　1954年の４月からです。それから養成所が1965年３月に最後の卒業生を出すまで10年間続けました。これは僕の大学の附属図書館の幹事の山口隆二先生に頼まれて先生の代りに行ったんです。最初は経済学を数年教え，それから社会科学資料という講義をやったんです。1964年に養成所が短大に昇格したその年の12月に世田ヶ谷の下馬に移ってからも，途中何年か中断はありましたが，続けました。今年の３月に僕

が大学を辞めるのと短大が閉鎖したのとちょう度同じ時期でしたよ。

宮地　先生の講義の評判はなかなかよかったそうですね。長沢規矩也先生とならんで人気があったとか。

細谷　いや僕なんか長沢先生のような本物に比べるとインチキですよ。長沢先生は最近亡くなりましたが惜しい事をしました。先生は和漢書の書誌学の実用的知識を撤底的に教えましたね。僕は今年も筑波へ移った図書館情報大学の専攻科のお手伝いをしますが，西洋の書誌学で長沢先生みたいな講義をいつかやってみたいと思ってます。僕の講義のとりえといえば，図書館の現場にいたですから書物を集める話でも，使う話でも臨場感があったということですかね。短大になってからは統計文献センターで統計資料の調査をやった話なんかは学生に喜ばれたようです。やはりユーザー側の立場に立った話をしたのがよかったんでしょう。しかしそれにしてもこの頃はマンネリになってしまいました。筑波ではまた初心に返ってやりますよ。

渋田　先生が共同執筆した『参考資料の利用と作成法』（日刊工業新聞社）の「社会科学の参考資料」は現場でよく使いました。われわれが現場で使えるレファレンス資料としてはあれがはじめぐらいだったんではないでしょうか。

細谷　あの本は，慶応大学の図書館学科へ非常勤で手伝いにいって藤川正信さんと知り合いましてね，昨年亡くなった小林胖先生と３人で統一フォームを決めてはじめたんです。仲々できなくて最後に藤川さんがつきっきりで一週間カンズメになりましたね。

宮地　文部省のドキュメンテーション講座は，養成所へ行かれる前ですか。

細谷　ずっとあとですよ。あれは文部省の図書館課に斉藤国夫さんという専門官がいて，小樽商大の出身ですが，この人に頼まれたんです。確か数回やりましたよ。

杉本　ドキュメンテーション講座の第１回は昭和36年です。

細谷　翌年の第２回には，水田さんと国立国会図書館の庄野新さんと３人で話をしたんですが，その時に「社会科学参考図書目録」という立派なビブを３人でつくったんですよ。あれはあの当時としては結構役に立ったようですよ。

杉本　僕も１回やっている。「学術雑誌の編集方法」という話をした。第７回の時もやっている。

細谷　後になって段々機械化の話になって僕らの出番はなくなりましたね。

渋田　1956年頃から『社会科学年表』（同文館）の作成に参加されていますね。

細谷　いや，僕はあの『年表』の最初は全然知りません。あれをはじめたのは水田さんで，僕が最後に参加したころは山秀さんが中心になって一橋の若い人を動員してやってました。僕は最後の段階で参考図書の補充を手伝っただけですよ。

杉本　結局，あの『年表』は全４巻のうち，最初の第１巻が出ただけで同文館はつ

ぶれたんだね。細谷君なんかセールスをやったんじゃあない。

細谷　いや，そんなことはないですよ。

杉本　同文館の社長の服部幾三郎（故人）という人は中山伊知郎の同期生で，だから一橋の連中の本をよく出したんです。あの『年表』は，28年に横浜国大で経済資料協議会の総会をやったとき，長洲一二君がＰＲしてましたね。あれは高島一門がやったのです。しかし最後はほとんど山秀でしょう。

細谷　そうですね。しかしあの『年表』は海外の図書館関係者の間では高く評価されていますね。

日本経済文献センター時代

渋田　それでは，日本経済統計文献センター設立の頃に移りましょうか。

細谷　文献センターができたのは1963年です。これは先程いった文部省の斉藤国夫氏が立案したんですが，僕もずい分手伝いました。

杉本　専門分野別の資料センターをつくる構想というのはどうしてできたの。

細谷　それは1962年の５月に日本学術会議が人文・社会科学の総合研究機関の設置について総理大臣（池田勇人）に勧告を出したんです。ところが文部省はその実施には尨大な経費がかかるので研究機関の設置は見送って，その勧告の第３段階の要望だった資料センターの設置の方をとりあげたんです。それで今の５つの文献センターを共同利用施設としてつくったんですね。

渋田　細谷先生が統計の資料を研究されたのはその時からですか。

細谷　いや，僕は文献センターのできる前は資料部で洋書の収集をやってまして，センターへ移っても数年間は規則作りとか府県統計書の収集をやってまして，別に研究なんていうのはやってませんよ。

杉本　センターができる前の統計の収集は誰がやっていたの。明治の府県統計なんかはかなり集めていたんでしょう。

宮地　図書館にはたくさんありますよ。

細谷　あれは集めたというより，官庁からの寄贈で自然に集ったんでしょう。それで段々思い出しましたが，あの前に研究所の大川一司先生が中心になってやっていたロックフェラー・プロジェクトというのがあったんです。これは研究所の共同研究である日本経済の成長の実証的研究をさらに精密化するために，明治以降の国民所得統計のデータを揃えようというプロジェクトで，ロックフェラー財団から資金をもらっていたんです。所が戦前の古い統計資料がなかなか集らなくて皆苦労しました。そのうちに一度一橋にあるものを先ずきっちり押えようという話がもち上りまして，これは多分研究所の伊大地良太郎先生がいい出したんだと思いますが，それで先ず図書館から調査することになったんです。この時の指揮官は経済学部の統計学の磯野修先生

でした。そうやって学内全部を調べてできたのが『一橋大学所蔵統計資料目録（予備版)』1960～63，4冊です。

これをやって分ったことは，とに角わが大学にはやはり統計は相当あるということでした。だから統計文献センターが一橋にできたというのは，研究所の日本経済成長研究のデータの整備（研究所では長期経済統計といっていますが）と，伊大知・磯野が指揮した統計資料の所在調査がきっかけになってるでしょう。文献センターの設立の趣旨は，国内で一番資料の集っている専門分野に予算をつけて完全なコレクションとして，これを研究者に公開するということですから。それで昭和39年頃から本格的に統計資料を集めだしたんです。ちょうど昭和女子大が明治の文学資料を集めてましたでしょう。それから同志社大学が社会主義文献を集めていたし，社会党の鈴木茂三郎も集めていました。あの頃は古本市場で明治ものがどんどん値上りしていった。それに文献センターの明治統計資料集めが参加したということになるんでしょうかね。それから明治ものがどんどん値上りしていった。みんな自分で自分の首をしめたということになりますね。

渋田　もうひとつの統計データのドキュメンテーションの方はどうなったんですか。

細谷　これは色々 IBM の機械で実験をやりましたが，結局実験に終りました。というのは，機械でやろうとしたのは，うちと神戸大学の経営分析文献センターで，神戸の生島さんなんかと連絡をとって，機械を動かすに最低限必要な人員の要求をしたんですが，これが通らない。もうひとつは入力データの整備にたいへんな人手がかかる，これはアルバイトの人間でもいいんですが，これを雇う予算がつかない。そういうことで色々な実験はやりましたが，うまく行きませんでした。実用システムにはならなかった。伊大知先生がセンター主任のときに，文部省の科研費をとってドキュメンテーションの研究会をやったのもその頃です。慶応の藤川さん，JICST の高橋達郎さん，水田さん，その他色々の方面の専門家を集めて3年やりました。はじめの1年位は，全く専門が違うのでお互いのテクニカル・タームが通じないんです。2年目位からやっと通じたんです。3年目になって折角これだけやったんだから成果を残そうということになって出したのが『社会科学ドキュメンテーション』（丸善）です。

杉本　あの研究会には，科研費を通すため，篠原三代平さんや，私も名前を出していた。

細谷　そうですね。とにかく日本で社会科学ドキュメンテーションという言葉が定着したのはあの本が出てからでしょうね。それはそれとして僕自身は，文献センターの仕事が仲々軌道にのらず，研究所からはセンターは何をしているんだといわれて沈滞期に入っちゃったんです。あの頃が一番苦しかった。

渋田　先生は沈滞期に入ったといわれましたが，あの『社会科学ドキュメンテーシ

ョン』が出た昭和43年頃は，戦後の学術情報史の中で何かひとつの区切りになるような時代だったんですかね。

細谷　うーん，客観的にどういう時代だったか今正確にはちょっと一口にはいえませんが，ちょうどその２年前に僕はセンターから『わが国における学術情報政策に関する資料集』というものを出しているんです。これは本来は文部省で出す予定だったんですが，事情でわたしがやることになり，文部省から予算を別途につけてもらったんです。これなんかを今見ますと，やはりその頃学術情報体制を国としてどう考えるか，そのうちでも人文・社会科学関係をどうもっていったらよいか，という問題について学術会議はさかんに勧告や要望を出していますね。ただそれが国の学術情報政策として一元的に統一化されていない，海外ではどんどん進むのにこれでは日本は遅れるばかりだ，という問題がマクロ・レベルでもありました。文献センターの悩みというのはそういう情況の中のミクロ版ということになるんでしょうかね。

渋田　この頃，先生は『日本経済分析文献索引』というのを編集していますね。

細谷　ええ，あれはね，篠原先生が伊大地先生のあとにセンター主任になって，何か文献目録を出そうということになってはじめたんです。５号でやめましたがね。

宮地　その前に社会保障の文献目録をつくりましたね。

細谷　いや，『文献索引』の第１号は68年の６月で『日本経済文献目録，No.１　社会保障（1945～1967)』が12月ですから『社会保障』は後です。その頃も中小企業の文献目録をつくっていたんですが，これは刊行できませんでした。その中に梅村又次先生がセンター主任になって，センターに開発部門というのをつくって統計資料やデータの研究部門を独立させたんです。僕が統計資料の研究をぼつぼつはじめるようになったのはその頃からですよ。

梅村先生の後の主任が藤野正三郎先生で，僕に「ロックフェラー・プロジェクトは明治20年頃からの推計しかやっていない。なぜかというとそれ以前のデータの信頼性が全くないからだ。あんたはとにかく20年以前にどんな統計資料が出ているか，何でもよいから徹底的に洗ってほしい」といわれたんです。それではじめた仕事が『明治前期日本経済統計解題書誌』です。あれは最初下巻を先に出して，次に上の１，２，３と出して，さらに補遺版をつくりました。文献目録の作成者としては，全く図書館の目録係泣かせみたいな本をつくりましたが，なぜそうなったかというと何しろやりはじめたけれどどうなるのかさっぱり見当がつかない。そのうち報告の締め切りの年度末がきてしまったので，やむを得ず比較的まとまっていた物産統計を出すことになり，これが全体の構成上，最後にくる予定だったので下巻としたんです。とにかくこの仕事は僕にとってはしんどかったが，はじめてひとつのテーマを５年間深くつっこんで集中してやれたという点でたいへん貴重な経験でした。この仕事では藤野先生と

センターの松田芳郎さんや梅村先生に随分教えてもらいました。大塚先生は僕に産業革命史のビブをやれといったけれど僕はまだそれをやっていません。しかし，これで大塚先生から与えられた宿題のひとつは果したような気がしました。というのは統計の整備というのは近代化の前提でしよう。産業革命は近代化を完成させるわけですからね。大塚先生自身も僕にはいわなかったが，豊多摩刑務所にいる時に，出所したら日本の統計資料のビブをつくるという計画をもっていたんですよ。

それから日本統計協会から百年記念事業出版で杉亨二の日本で最初の統計学の講義ノートの復刻『杉亨二「挕笁笈」複刻版』を出したんです。このいきさつというのは，明治前期の統計調査をやっていると，どうしても日本で最初に国勢調査をやった杉さんが中心になり，色々調べているうちに偶然にうちの図書館でこの講義ノートをみつけたんです。それを統計協会の会長の森田優三先生と伊大知先生に見せたところ，杉さんは統計協会の初代の会長だから，協会の百年記念事業に是非このノートを複刻して出そうということになった。それで見つけたのは僕だからついでに解説も書いたら，ということになったんです。これも協会の鮫島龍行に随分お世話になりましたが，僕としてはとても楽しい仕事でした。

欧米の図書館を回って

渋田　さて先生は昭和45年に欧米に留学されていますが，その時の見聞を少しうかがいましようか。

細谷　僕は勉強といっても何もしなかった。欧米の社会科学系の図書館を見てきたんです。

杉本　シェフィールド大学の日本研究センターに招待されていったんじゃないの。

細谷　いや違うんです。あれはこちらから頼んで籍をおかしてもらったんです。あそこで日本経済研究をやっているアントニー・ダグラスという若い人が日本にきていた時に身許引受人が研究所の山秀さんだったんで，山秀さんから頼まれて彼の日本経済研究の資料収集の手伝いをしたことがあるんです。それでヨーロッパへ行くことが決ったときに図書館を見学するにしても根拠地をひとつつくっておこうと思いましてね，彼に相談したんです。結局彼の家に下宿することになったんですが，これはイギリス人の家庭生活を知る上でとても役に立ちました。もっともアントニーが日本語がうまいし，日本研究センターの連中もみんな日本語がうまいので僕はとうとうさっぱり英語はうまくなりませんでしたよ。

渋田　図書館はどういう所を廻ったんですか。

細谷　4月にモスコーへ入りましてね。2週間位いてレーニン図書館，科学アカデミーの社会科学記念図書館，モスコー大学の図書館，外国語文献図書館を見て，それからレニングラードへ行ってサルトゥイコフ・シチェドリン国立公共図書館，レニン

グラード大学図書館を見ました。5月に入ってストックホルムへ入り，僕はヴィクセルを昔やったんで少し北へ入って，彼のいたルンド大学などを眺め，それからハンブルクへ飛んでキール大学の世界経済研究所へ行きました。パリ，ロンドンを通ってシェフィールドへ着いたのが6月でしたか。それからそこを根拠地にしてイギリスの大学やヨーロッパの大学や国際機関の図書館を見て歩いたんです。ついでに美術館も見て歩きました。これは楽しかったですね。僕が日本の美術を勉強しなければいけないと本気になったのはその時からですよ。

杉本　資料の収集はしなかったの。

細谷　ええ，図書館関係の資料は集めましたが，社会科学書は全然買いませんでした。もう経済研究所の洋書収集の仕事から離れていましたんでね。ただこの機会に社会科学古典のコレクションは見ておこうと思いまして，ロンドン大学のゴールドスミス文庫，グラズゴー大学のスミスの蔵書，エディンバラ大学，オクスフォード大学，ケンブリッジ大学の図書館，ブリティッシュ・ミュゼーアム，ローマとフィレンツェの国立図書館，ミラノのフェルトリネリ研究所，アムステルダムの国際社会史研究所なんかへは行きました。これはたいへんな勉強になりましたね。

渋田　アメリカにも行かれたんでしょう。

細谷　ヨーロッパを終えて日本に帰る途中に寄ったんですが，そんなに長くいなかったんです。コロンビア大学，エール大学，国会図書館，ハーヴァード大学だけです。コロンビアではセリグマン文庫，ハーヴァードではクレス文庫を見ました。

宮地　カーペンター（K. E. Carpenter）はいましたか。

細谷　いましたよ。彼はクレス文庫の主任でした。セリグマン文庫はコロンビア大学の中央図書館（Butler Library）の貴重書書庫にあるんですが，僕がいった時は単行書の整理は終っていまして史料の整理をやってました。セリグマンは各国の紙幣を集めてましてね，それを係りの人がいちいちアイロンでしわをのばして目録をとっていました。これではいつまでたっても冊子目録はできないんで，僕が「単行書だけの目録を先に出したらどうですか」といいましたらね，「そんなことはしません」といってましたよ（笑）。クレス文庫はハーヴァード大学の Graduate School of Business Administration の図書館（Baker Library）の一室にあります。そこではじめて主任のカーペンターに会ったんです。

杉本　うちの娘と会ったのはその時……。

細谷　その前ニューヨークにいた時です。先生のお嬢さんはブリンモー大学に留学してたんです。ブリンモーというのは，津田塾大学の初代の学長の津田梅子が留学した大学で，それ以来津田と姉妹校なんですね。先生にどんな暮らしをしているかみてきてくれといわれましてね，僕はペンシルヴァニアの駅でお嬢さんとデートしてフィ

ラデルフィアへ行ったんです。ここはB．フランクリンの記念の町でフランクリン博物館やフランクリン・ライブラリーがあるんです。ところがお嬢さんとの魚料理屋で楽しくおしゃべりをしているうちに夕方になってしまい，あわてて出て博物館は見れたんですが図書館は外から見ただけでした。僕は大塚先生から最初に読めといって渡されたのがこの図書館のことを書いた本だったんで一寸残念だったです。

社会科学古典資料センターのこと

渋田　先生は外国で社会科学の古典文庫をたくさん見てこられましたが，これは一橋大学にできた社会科学古典資料センターと関係がありますか。

細谷　直接にはないが間接にはあるでしょうね。クレス文庫やゴールドスミス文庫をみてびっくりしたのは実にふんい気のよい部屋に大切に管理されているんです。専門の係官もいました。ゴールドスミスには Miss Canney，僕はこの人に会いにいったら休暇をとっていて会えませんでした。クレスにはカーペンターがいますね。それからその補充も系統的にやっていますし，利用についてもよく考えています。僕はうちのメンガー文庫とくらべて，ああ古典ライブラリーの管理というのはこれでなければ駄目なんだとつくづく思いました。それで日本に帰ってから『図書館雑誌』にそのことを書きましたし，うちの大学にこういうセンターが欲しいと館長にいったこともあります。ところがその後数年たって偶然のきっかけで Burt Franklin 文庫が一橋の図書館に入ることになったんです。その時に僕は都留学長の命令でニューヨークに2週間ばかり調査に行きました。この話は今年の3月に出したセンターの年報に書いたんで略しますが，とに角文庫はそのあと色々ないきさつがあって無事に大学へ入りました。その時に僕は学長に，あの文庫には千点位のマニュスクリプトがあって，とても日本人のライブラリアンの手におえない，是非クレス文庫のカーペンターを呼んでくれと頼んだんです。学長は心よく引きうけてくれまして，これもたいへん学長は苦労されたんですが，やっとカーペンターの来日が実現しました。彼は10ケ月程一家できまして責任を全部果してくれました。カーペンター一家とは奈良へ行って東大寺が昭和大修理の時で大仏殿の屋根の上へあがったり，お水取りをみたり，楽しい思い出がいっぱいありますよ。そのうちに小泉明（故人）先生が学長になられたんですが，先生は都留学長の時に図書館長でフランクリン文庫の導入のために熱心に学長に協力したんです。それがきっかけで先生は学長になられてから，「細谷君，是非クレス文庫のような古典センターを一橋に導入しようではないか。」といわれ，その具体案の作成を当時の館長の増淵龍夫教授に命じたんです。たまたま彼と僕は商大の同期だったんで僕も大分手伝わされました。そんないきさつで結局センターができると僕はセンターへ移ったんです。

渋田　話をききますといい図書館はやはり学長と館長がタイアップしなければでき

ませんね。

細谷　それとね，一橋はそういう時に評議会も学部教授会も反対しないでしょう。これはやはり，福田徳三，左右田喜一郎，三浦新七，大塚金之助という一橋の書物好き，古典好きの伝統でしようね。都留先生は大塚先生をたいへん尊敬されてましてね，大塚文庫を一橋が買った時に僕は都留学長の内諾のメッセンジャーボーイをやったんですよ。

渋田　古典資料センターには一橋の全部のレアー・ブックを集めたんですか。

細谷　ほぼ全部といっていいでしよう。

『大塚金之助著作集』編集のこと

渋田　最後に大塚先生の著作集の話をうかがいましようか。先生は大塚先生に出会ってライブラリアンとなり，大塚著作集の編集で一橋時代を終えることになるわけですね。

細谷　全くそうですね。先生が亡くなったのは4年前の1977年の5月9日ですが，その年の秋頃からぼつぼつ門下生の間で話が出ました。翌年の5月の門下生の会（大塚会）で正式に決って岩波書店にもちこんだと思います。岩波はすんなり引きうけてくれましたんで，それから急ピッチで準備を進めたんです。編集はなるべくしょっちゅう顔を合せることのできるメンバーの方がよいというので，一橋にいる門下生の都筑忠七（社会学部），良知力（社会学部），津田内匠（経済研究所）の先生方と，事務局ということで僕が参加しました。所がやり出してみるとこれがたいへんでした。箱根の仙石原の山荘と吉祥寺の自宅から資料を全部大学へ運んで整理をはじめたんですが，先生は何しろ杉本先生と同じで一旦手に入れた本でも資料でも絶対に棄てないんですよ。この整理には大塚先生の明治学院大学時代のゼミナール学生だった戸塚隆哉（日本ドクメンテーション協会），松井博（中央学院大学図書館），石井秀雄（明治学院大学図書館）の諸君が手伝ってくれました。また著作目録は先生自身が敗戦直後につくられたものや，津田先生が作ったもの（60歳まで）もあるんですが，何といっても明学出身の磯崎道雄君（都庁）の努力が大きいんです。彼はゼミに入れてもらえなかったんですが，先生が好きで10年以上かけてこつこつと著作目録をつくっていたんです。それから先生自身が自分の著作の現物を相当もっていた。そんなことで何とか著作集刊行のめどがたったんです。これまで7冊出したんでもう一息というところです。くわしい話は『書誌索引展望』の5巻1号（1981, 2）に書いたんで略しましよう。

渋田　それでは第二部の細谷先生の座談会を終らせていただきます。まだ一橋大学の百年記念募金で入った「ベルンシュタイン＝スヴァーリン文庫」の話とか，うかがいたいことは色々ありますが，またの機会にします。どうも長時間ありがとうございました。

第3部　経済資料協議会のこと

細川　それでは僭越ですが私が聞き手を代表して第3部の経済資料協議会の方に話題を移させていただきたいと思います。協議会は最初に申しましたように，本年で創立30周年を迎え，しかも協議会といえば『経済学文献季報』と言われるほど，協議会の主な事業となっています，この季報が本年度初号が丁度100号として刊行することになります。

協議会30年，季報100号に到着した現在の両先生のご感想，ご感慨をお聞かせ願いたいのですが。

杉本　この30年よく続いて来たと思います。はじめは情報交換や懇親から始まったのが季報のような編集事業も加わり，会員機関の負担も大変だったことと思います。振りかえってみますと，なんといっても東にくらべて西部会の結集が固く，これが協議会を今日まで持ちこたえさせた基盤だったと思います。その点で前田理事長の実行力は大したものです。季報が出版できたのも前田さんが有斐閣京都支店と交渉した成果ですし，また同朋舎に発行を引き受けてもらうようになったのも前田さんの御尽力によるものです。統計資料目録についても同様です。東部会の方はその点で西部会に大いに感謝しなくてはなりません。東の方は各機関それぞれに個有の内部事情があって，西のようにまとまりがつかず，今日にいたっているわけですが，内部事情はどこにでもあることですからこれが東の制約条件というわけでもないでしょう。もっとほかの事情によるのでしょうが，これはおそらく東京論といった問題領域に属するような気もします。変な話になってしまいましたが，これも感想の一端です。

細谷　僕は昭和26年に協議会が創立されたときからのメンバーで杉本先生，前田さんや生島さんと同じ協議会第一世代の人間です。はじめの10年間だけ事務局をつとめさせてもらい，また『文献季報』は，3回だけ編集センターをやりました。昭和43年に協議会が新発足したときには統計文献センターの方の仕事に追われていまして，経済研究所の資料部から離れていたんです。それでその時の資料部長の意見で資料部は新組織に参加しないことが決ったんです。その頃僕は個人会員としては残りましたが，ほとんど協議会の事業のお手伝いができませんでした。その間に協議会は着々と発展し，今度30周年を迎え，また『文献季報』も100号を出すことになったことは心から嬉しく思っています。これも会長，理事長を中心にして会員一同が団結してここまでやってきた賜物と思います。僕もこの3月でちょうど大学を停年退職しました。この一年は浪人して『大塚金之助著作集』の刊行に力を注いできましたが，これもこの11月で最終巻の第10巻を刊行するめどがたちました。ですから僕はまた来年から昭和22

年に大塚先生とお会いした時の一年生の気持になって皆さんの仲間に入れてもらい，皆さんと一諸に勉強していきたいと考えています。

細川　協議会および季報の創設，創刊期のことについてはすでに本誌が協議会「20年を顧みて」という座談会で，両先生も出席され，当時のメンバーがお集りになって，お話を伺っています。また本誌本号では30年の歩みの小史と年譜を掲載しますので具体的な事実等は時間の関係もありますので省略させていただきます。そこで両先生にとって協議会とは，そして季報とはというお話に入っていただきたいのですが，これは非常に抽象的な問いでありますので，両先生のかかわりをすでに最初でふれさせていただきましたが，ここで簡単に紹介させていただきますと，

杉本先生は協議会発足当時から主導的役割をはたしてこられ，昭和43年協議会が一応組織として確立すると初代会長として昭和53年５月まで10数年間にわたってその重責をはたしてこられました。他方季報は創刊より編集幹事として，また創刊号には「刊行のことば」を執筆され，当時の経済ビブリオグラフィーの状況分析と季報の必要性を述べておられます。さらに昭和34年と昭和46年には横浜国立大学の編集センターとしてご活躍下さいました。

細谷先生は協議会創設時から昭和36年までいわゆる協議会確立期の困難な時期に事務局長としてその重責をはたされました。また季報の方も創刊以来編集幹事として，さらに昭和32，36，40年度の一橋大学の編集センターの中心としてご活躍下さいました。

この間の先生方の想い出をご披瀝下されば……。

杉本　私は横浜国大へ赴任したとき，年度の途中だったものですから半年は授業担当がなく，その代わりに学部資料室の整備をまかされました。その関係で協議会に顔を出すことになり，ずるずると30年近くもおつき合いすることになってしまいました。適当なときに資料室の管理から手を引けばよかったのですが，決断力，実行力に欠ける私のことですからそのまま来てしまったのです。

季報編集については私も提案者の一人だったと思いますが，編集準備の条件などはすでに京都で前田さんが整えられたのです。当時の協議会の陣容では少々荷が重かったかもしれませんが，あの頃は私たちも若かったので，なんとか発足させて，センターをリレーしてつないで来たわけです。でもさきほどのように東部会のセンター担当能力に限界が生じて季報の仕事が重荷になって来ていることは事実でしよう。

中途から会長，理事会という制度ができて，初代会長にまつり上げられましたが，実質のない名ばかりの会長に終始し，季報やその他事業の維持，拡充になにも寄与できず，御迷惑をかけつづけ恐縮しているわけです。

細谷　僕が昭和26年１月の協議会の創立に参加したのは，ちょうど上原学長，大塚

所長による経済研究所の改組が終り，都留所長の下で新発足したばかりの時でした。その頃は洋書の輸入も再開され，また神田にはまだ学者が生活に困って手離した洋書がたくさん出廻っていました。書物収集では苦労もありましたが，それよりも新刊書は海外から続々と入ってくるし，神田では意外な古書が安く買えるし，ということで今になっては，楽しい思い出ばかり残っているという感じです。当時，洋書輸入の大手は全部東京に集っていた。それからＣＩＥの図書館や東大の図書館にアメリカから雑誌や図書も入ってきていましたから，自然に海外の洋書の情報が東京に集中していたんです。関西の皆さんが協議会をつくろうと関東に呼びかけられたのは，そういう事情があったからだと思います。僕達も他所の大学の資料収集の情報はぜひ欲しいと思っていましたから協議会の結成に喜んで参加したわけです。

それで２，３年は情報の交換と親睦を主にした会合をやり，神戸大の原さんや生島さん，大阪市大の道家さん，京大の前田さんなんかと親しくなったわけです。「20年を顧みて」の座談会で原さんもいっていますように，あの頃は会員の人数も少なかったし，同志的結合といいますか，みんなで楽しくやりました。おかげで僕のようなルーズな人間が10年間も事務局の大任を果すことができたんだと思います。今から考えるとよくつとまったもんだと我ながら不思議です。

『文献季報』の刊行の話をはじめにいい出したのは誰かということが座談会でも問題になっていましたが，僕の記憶ではやはり杉本先生だと思います。それを創刊号の刊行にまでもっていったのは前田さんの功績です。僕も少しはお手伝いをしました。今でも覚えているのは創刊号か２号の編集を京大経済学部の以前の建物の３階の資料室でやった時です。前田さん，竹森さん，同志社の藤枝澪子さんなどと一生懸命やったんですがさっぱり能率があがらない。ふと寒暖計を見るとなんと38度になっているんです。それで前田さんが「こりゃあかん，もっと涼しい所へ移ろう」といってお得意の機動力を発揮し，大学の車を徴発して編集資料を全部もって清滝へ移ったんです。ここは実に涼しかった。ところが僕はその晩，東京からの電話で娘がはしかになったからすぐ帰れといわれて呼び戻され，清滝でのお手伝いできませんでした。あの頃一緒にやった竹森さん，それから中国文献を熱心に手伝って下さった同志社の大隅先生は早くに亡くなられました。竹森さんからいただいた京人形が今でも家に飾ってありますが，それを見るたびにいつもあの頃のことを懐かしく思い出します。僕は雑誌の他に単行書の採録を担当しましたが，現物チェックのためにいつも神田の書店街をうろうろ歩き，なかなか書物が見つからず苦労をしました。一時栗田書店が新刊書をおいてある倉庫を解放してくれまして，この時は実に能率がよかった。そのうちにこの栗田のシステムは廃止され，また辛い新刊書探しをやる破目になったんです。

『季報』で僕が最後にお手伝いしたのは昭和41年の夏の浜名湖弁天島の会議の時に

つくった分類表の修正案と文献採録基準です。特に分類表ではマル経の先生方と近経の先生方との意見の調整で苦労した記憶があります。『文献季報』ははじめ3号位でつぶれるんではないか，などと悪口をいわれながらとうとう100号迄出たことは大いに誇ってよいと思っております。今色々な意味で『季報』も転換期にかかっており，改革のための「特別委員会」で対策がねられております。これについては僕がここで意見を述べるのは控えますが，何とかしてこの大切な『文献季報』を廃止するという事態だけはさけたいと心から願っております。

細川　最後に次の第4部とも関連いたしますが，季報を除いた協議会の経済書誌の活動でご印象に残っていることがありましたら……。

細谷　『文献季報』以外の協議会の書誌活動で僕がお手伝いしたのは『経済資料研究』です。この雑誌の刊行されたいきさつは，創刊号（1969年3月）編集後記に当時の編集者（東経大の菊川さん，京大の小松さん，アジ研の中村さん）の連名でくわしく書かれていますから省略しますが，僕はこの頃は統計文献センターが方向を暗中模索している最中で，昭和43年の第23回総会（小樽商大）で協議会が新組織で発足したときには一橋は機関会員として参加できなかったんです。それで個人会員として参加して新雑誌発行のお手伝いをして誌面構成なんかを決めた記憶があります。とくに「レファレンス・ブックス　近代日本経済関係2次文献」は，僕がやろうといいだしたものです。そこで責任上第1回をどうしてもやらざるをえず，無理に東大の鈴木英夫君にお願いし，僕も少し手伝って日本経済学史でスタートしたわけです。僕の当時の考えでは，それ以前から杉本先生と僕がやろうといっていた「経済資料ハンドブック」が軌道になかなかのらないので，とりあえずその中味のひとつをこのシリーズの形でスタートさせ，それが何年か続いたら改訂増補して「ハンドブック」に収録しようと思っていたんです。今度協議会の30周年記念事業としてスタートすることになった『経済資料ハンドブック』の最初の提案を僕は，昭和40年の協議会第20回総会（大阪市大）でしていますが，今度いよいよ「レファレンス・ブックス」のこれ迄の成果が全部この『ハンドブック』に収録できることになったわけです。

ついでにいいますとこの雑誌のレイアウトはほぼ関東側で決めたのですが，表紙のデザインは，菊川さんが奥さんの弟さん（武蔵野美術大学出身）に頼んでやってもらったんです。108の正方形が9行12列に整然とならんでいるのは社会科学ドキュメンテーションのシステム化を表わし，真中の9箇がやや乱れているのは社会科学ドキュメンテーションは自然科学のように整然といかないのだということを表現しているのだ，と僕は勝手に解釈しています。今度菊川さんにきいてみたら弟さんはもちろんそんなことは考えないで単純にデザインとして書いただけだそうです。表紙の色も関西で黒だ赤だと10種類位意見が出て調整に菊川さんは苦労したそうです。

この機関誌も編集者の皆さんの努力のおかげで15号まで出たことは立派なものですが，この際少し希望をいわせてもらいますと，ひとつはもう少し発行回数を増やせないだろうかということ，第2は創刊の辞で杉本会長が述べておられる刊行目的のうちの第2の「経済資料の内容そのものの組織的研究を，研究者とは自ずから異った独自の立場から行なう」という面の追求を今後さらに一段とやってもらいたいということです。これは実は研究会のあり方とかかわるわけですので，ここではくわしく申しません。また第4部の方で機会がありましたらその時にとりあげましょう。

第4部　経済書誌索引の展望

経済資料協議会の転換期について

細川　第3部協議会30年の到着点から次の第4部として将来の展望を両先生からお伺いしたいのですが，まず私個人なりの現状認識を話題として提供させていただきます。さきの協議会「20年を顧みて」の座談会の最後に，『統計資料総合目録』の編集に頑張ろうという言葉で結んでありますが，そのご10年，結局この目録作業のために協議会は……。

杉本　かなり大きなエネルギーを集中した。

細川　この10年間に協議会活動が一つの山となり，そのご沈滞期に入ってきたように思うのです。この頃から世代交替論がでたり，話は以前からあったわけですが，『文献季報』は100号をもって大改革をやろうという……。その改革がなかなか緒につかないものですから，100号でやめようという話もでました。その発信地はどうも私となっているようですが……。

協議会は個人でなく，機関というものが主力で，実際はその機関に属する構成員，つまり個人がやってきたのですが，大体今の各機関をみますと，それぞれ有能なメンバーが育つとやがて交替される，配置転換で。

杉本　機関内部の配置転換のためということですか。

細川　そうです。協議会のそもそもの出発点のときは小規模な資料室，つまり図書室（館）という大きな組織とは別の機関で構成されていた。この機関のメンバーは事務員（官）の流れから，あるいは図書館員の流れからも，いわば腰掛け的存在であった。少し仕事になれてくると，本流の事務室（部）や図書館に移っていくということがあって，いわば小規模資料室を主体とした機関ということが本当にしんどくなってきている。

宮地　これは「ドキュメンタリストとしての地位」とか，あるいは「経済学文献のスペシァリストをめざす人々のために」という問題とも関連がありますね。

杉本　そうですね。

細川　結局機関の組織力ということが……。前の座談会では，組織力は関西中心だということを言っておられますが，関西自身も組織としては弱くなってきているのではないか。それでどうしても個人が前面にでてやっていかなければ，今までの力が発揮できないのではないか。そういう人たちを協議会が育てていかないと現実に『文献季報』を維持していくことができないのでは。スペシアリストをどこでどのように育てていったらいいのか，というまあ世代論ということが協議会の大きな課題となってきていると思うのですが。

渋田　それからもう一つ，補足ですが，ちょうど今回の企画を細川さんと話し合っていたとき，第一世代，第二世代，われわれは多分第三世代になると思いますが，昔のいろいろな遺産を引き継ぐ世代として考えてみると，さきの第２部で細谷先生が大塚金之助先生からブックマンになりなさいと言われましたね。われわれも初代，二代の世代から種々なことを教わらなければならないけれども，制度面について考えなればならないことがあります。いわば身分的保障の問題，引き継ぐ側の制度的確立の問題，このことを大学が保障していくということです。この面は日本の場合非常に貧弱なんですね。この点を文部省に働きかけていく，つまりまず制度づくりが必要ではないかと考えます。

協議会の30周年記念も，ただ祝うだけに終るのではなく，このことを訴えていく方向に考えてもよいのではないか。『文献季報』の業績を背景にして，文部省に制度面の確立を要望したらと思います。つまり専門家の地位の問題，大学にそろそろこのようなポストを設けていくことも今後の課題ではないでしょうか。それから第一世代の時代はいわば開拓時代であって，日本ではもちろん制度もなかったし，ポストもなかった。ある意味では，開拓しながら制度をつくり，ポストを確保していった時代だと考えます。これからの時代は制度化していく時代ではないだろうか。昔の開拓時代の人たちは，一人がオールマイティな能力を発揮されてきた。われわれの時代は，大多数が集団で身につけていく時代ではないかと考えます。

杉本　私は横浜国立大学にいって，授業をやるのが本職でしたが，学部に資料が整っていないので，これではなんとかしなくてはということで，本来の職務以外のことまでやらなければならなくなった。どうしても片手間仕事ですから間に合いません。制度的にドキュメンタリストを大学内部に確保することが必要なんだと思います。少しは前進して，横浜国立大学にも貿易文献資料センターができて教官定員が１名つきましたけれど。

細谷　私なんかは敗戦後という過渡期の産物という気がしますよ。全く好き勝手なことをやってきた。それで，資料部員から上って，副手になり，助手になり，助教授

になった。助教授のポストは何でもらったかと言えば，文献センターができて，そこに助教授のポストができたので，それをもらったのですね。だから，私は自分の坐る椅子を文部省からシステムとともに持ってきた。古典センターの場合も同じようなものですね。古典センターに研究所としての教授の椅子がなければ，社会科学古典のドキュメンテーションができないということから教授の椅子を引っぱってきた。それで，私が専任の教授となった。私のあとを本職の杉山忠平先生に引き継いでもらったのです。どうも30年間というもの，大塚金之助という大きな人物がいたため，また一橋大学がたまたま伝統があって，私みたいな者に勝手なことをさしておいた。これは特殊なケースだと思います。だけど特殊にしろ何にしろできたものは established されたものです。文献センターが一橋大学だけに出来たのではなく，神戸大学，東京大学，京都大学にも共同利用施設が出来，そこに教官がいますから，それは一つの前進だと思います。

だから，細川さんの話を聞いて，なるほどなと思ったことは，やっぱりあの時代はみんな小さい資料室の職員で，あんまりルーティンな仕事が固まらないうちだから協議会のことをせっせとやれたのですね。ところが私の例が一番よい例ですが，研究所の資料部が固まってくると，いわば「彼は何をやっているんだ」と言うことになって……。結局研究所が協議会を脱退しなければならなくなったということに……。それ以来，私が研究所にいる限り協議会への復帰を言いだすこともできなかった。一橋大学の研究所の場合，私が勝手にあんなことをやったので反動期に入っちゃった。一橋大学が協議会に入るには研究所では入れない。偶々千葉大学から田辺さんという人が図書館の事務部長としてこられて，一橋大学は全体が経済の単科大学の出身であるから，何も研究所が入ることはない，図書館で入りましようと。これは田辺さんの意見だけれども，そういう意見の人もでてきたので……。資料部のところだけでやっていると，その中の人間がちょっとできるようになると出ていってしまう。図書館の場合は，一橋大学附属図書館が加盟すれば，そうめったやたらと人は動きませんから，細川さんのもっておられる悩みは解決できる。どうもそういう方向にもっていくということがよいのかも知れません。

細川　さっき，渋田さんが言った第一世代で開拓された時代，ある意味では小さい処で余裕をもってやれた。能力も非常に発揮できて，いろんな仕事ができた。ところが次にセンターとして確立するなり，また資料室として確立するなり，今度は大学，学部の中の行政的な仕事の枠組みに嵌め込まれるので，外部での仕事よりも内部での仕事におわれるようになる。

細谷　その結果，外にはなかなか出ていけなくなる。そのうえに配置転換があるから常にプロフェショナルでない若い人たちでやっていかなければならないことになる。

そういう問題をかかえながら，どうやっていけばよいのかということですが，そういう意味では先きに言った過渡期ということなんでしようね。

杉本　細谷さん，一橋大学の研究所が機関会員をやめた理由はもっと内部の仕事をやれ，余力がない現在は外部にかかわる仕事はやるなということが主だったのですか。

細谷　実際はね，どの機関も同じようですが，内部の仕事をこなすだけでもまだ時間が足りないですからね。物理的に計算したら時間がないから参加できない。それを言いだすことが容易にできない。研究所はそういう状況に追い込まれていった。

杉本　要するに相互協力問題ですね。大学図書館の相互協力がいろいろ取り上げられているでしよう。それぞれの機関の相互協力の意義に対する認識はどうなんでしよう。

細谷　全然ないんです。まず図書館内の研究者とライブラリアンの協力という問題では，もう一つの世代論というのがあるのです。研究者の世代論ですね。やっぱり大塚先生みたいな大きな目でみる世代から今や研究所の若手は三代目ですよ。そういう人たちは，ライブラリアンというものは自分たちの手助けになればよいのだとしか考えていない。悪い研究業績主義に侵されている。昔の先生のようなゆとりのある考えが全然ないんですよ。図書館間の相互協力という点で言いますと，相互協力をすれば結局自分のライブラリィの充実につながるのだという考えの人はいないんですよ。とくに一橋大学の場合は図書館が大きいでしよう。相互協力をすれば持ち出される方ばかりだという被害意識が強い。

細川　そうです，細谷先生が言われたことはわれわれの大学でも同じことが言えます。昭和の時代の人たちは世代がまた変ってくるように思われますが。

細谷　もう一つ若い世代には期待を持っていますがね。

細川　この世代の人たちはわれわれがやっていることには注目するけれども，反面余分なことをしているという意識を持っているのではないでしようか。

杉本　外国の場合，たとえば Journal of Economic Literature の索引編集には各大学の人たちが協力していますね。教授たちがみんな編集委員になっている。アメリカやどこでもいろいろな union catalogue をつくったり，bibliography をつくったりしていますが，どうしてああいう相互協力的な体制でやれるのか，細谷さんが外国を歩いて見たところではどうですか。

ドキュメンタリストの社会的地位

細谷　ドキュメンタリストの社会的地位ね，イギリスの場合，ライブラリアンの社会的地位は高いですね。

杉本　Aslib などのメンバーがそうなんですか。

細谷　そうですね。私がロンドンにいたとき，ちようど Aslib のなかに社会科学

部会ができたときで，第1回の研究会に出席しましたが，皆よく勉強していましてびっくりしました。それからグラスゴー大学に私が行ったとき，マツケンナという人がチーフ・ライブラリアンですが，これは館長ですけれど，大学の最高議決機関に参加しているんです。日本の場合の大学図書館長というものは古手の先生か何かがやっている。

杉本　日本では館長が専任でなく，若干授業をへらされるぐらいで，図書館に専念できませんね。

細谷　それについては，やはり長い歴史があって，そういう歴史と日本の歴史と比べてみると大部差があるんですよね。

杉本　アメリカの大学図書館側で日本の大学図書館を視察して改善を勧告したとき，アメリカにくらべて30年から40年ほどおくれているとか言っていたと思いますが。

細谷　アノネ，イギリスもやはり昔からライブラリアンの地位が高かったわけではないんです。

杉本　イギリスだって，進歩したのは戦後でしよう。

細谷　画期的な転換期は，20年代でしよう。30年代から第二次大戦の直前までに急に上ってきたんです。それについて，Library Association が悪戦苦闘してますよね。それで，彼らは自分たちが勉強して自分たちの学問をつけなければいけないんだと言って，Library Assciation であんなむつかしい試験をして，自主的にやっぱり努力して作ったんですね。やっぱり，闘争の結果勝ちとったんですよ。民主主義で皆んな自然にライブラリアンの地位を認めてくれた，と言ったもんじゃないんです。そういう歴史をふまえてやっと今の，僕が言ったような70年代のそのようになってきたんです。ところが日本はどうでしようかねえ。

杉本　なかなかむずかしいことです。例の20周年記念の座談会でも話しているんだけど，例の務業分析ね。国立の図書館長会議時代に司書の身分を確立せよ，教官と事務官の中間ぐらいの地位を与えて保障しなければ大学図書館は改善されないだろう，というわけで，委員会をつくって，司書の業務分析をやってもらって，これだけの仕事があるからこれだけの学識と経験を必要とするのだ，行政職とはちがう業務内容なのだ，という具合に分析した報告書を図書館長会議が出したので，私が協議会の総会にこれを参考にして協議会としてもドキュメンタリストの業務分析をして，スペシァリストとして確立する努力をやったらどうかと，40年の大阪市大の業務分析をして，スペシァリストとして確立する努力をやったらどうかと40年の大阪市大の総会に提案したことがある。私は出席できなかったのですが，資料担当者を特別扱いにするのは，組合の分裂になるからと言って，一部に反対があったようで，それでそのままになってしまった。

渋田　文部省の図書館政策の中には，アメリカの大学図書館の影響を強く受けていますね。一例として筑波大学図書館のように，ああいう図書館全体の機能面ばかりでなく，同時に図書館員の身分制度なんかは影響受けにくいんだろうか。

杉本　文部省も情報図書館課ができてから，前とは変ってきたようです。問題は人事ですよ。文部省側から言えば，国立大学に司書職の制度をつくって，業務分析にもとづいて一定の資格試験をやってみて，それにパスする人はいま何人いますか，ということです。人事院や大蔵省にかけあう場合に，現在のライブラリアンの実状では，迫力がないというわけです。現に図書館にいる人がもっと勉強していなければダメだということです。司書という特別な職種できれば，内部の配転はできないと思います。今だったら教務とか，学生部とかへ動かされることがあるでしょう。

渋田　僕なんかも今年配転を受けたんですが。細谷先生が先ほど言われましたように，アメリカなんかもライブラリアンがかなり運動していますね。僕もアメリカの大学図書館へ行く機会があったのですが，大学図書館でもライブラリアンの地位向上のために働きかけたということを聞きました。アメリカの60年代の初めが，日本の大学図書館の今の状態に似ていると，大学によれば，Librarians Association を結成して，大学の内外へ地位向上のために働きかけて来た。つまり訴えると同時に大分勉強もしたと言ってます。経済資料協議会も，機会があったら文部省や関係方面に要望を出してみたらどうかしよう。

細谷　いくら要望を出しても，仕事をしてない人間が出しても認めないということがあるでしょう。つまり実績をつくらなければいけないんです。

杉本　まず自分たちで努力して資質を向上させる実績をつくらないときっかけができないでしょう。

細谷　その実績というものはいろいろあるんです。例えばライブラリアンの中の仕事でもいい。例えば union catalog のいいものをつくると，それでもいい。それから学問にくっついたもの，これは一番理想だけど。自他ともに認めるそういう個人アルバイト，あるいは集団アルバイトをしっかりしたものがどんどん出なければやはり迫力がない。

杉本　大学の中で教官定員に対して必ず欠員がある。これをプールして司書の仕事を担当する講師，助教授をつくれないか。一部では実現されてはいますが。

細谷　教授スタッフが理解がなければならない。理解させるには何か力をつけた人が理解させなければならない。やはりルーテイン・ワークにおわれて何も仕事をしていないというんじゃダメですね。家に帰ってからでもいいし，日曜日でもいいし，主題を持って勉強してその成果を印刷かなんか形にして出したりする必要がありますね。

杉本　発表する機会はあるんでしょう。

細谷　それはいい仕事なら必ずげると思いますよ。

杉本　イギリスの Aslib の場合，Association of Special Librarians といって，ライブラリアンが自主的に仲間の団体をつくっているんですね。

細谷　Aslib なんかは一つの模範になりますね。

杉本　日本の専図協なんかとはちがうようです。専図協は機関の団体ですね。

渋田　アメリカでも一例として政府刊行物を研究する個人単位の研究集団なんかがありますね。

細谷　協議会も機関会員として今までここまでのことをしてきたんですからたいしたもんですが，これからはもっと Aslib 的性格を出したらどうかと考えるんです。

杉本　今まで季報を続けて来られたのも機関組織だったからです。やはり機関を通してやらなければできないでしょう。文部省の学術情報流通センター構想の中に JICST に対応した人文社会科学の分野のセンターがあるでしょう。季報のようなカレント・ビブもそこに集中してやるようにならないもんですかね。

細谷　あれがもしできれば相当肩代りできると思います。他力本願的な話みたいですが。

杉本　協議会側はソフトウエアを提供することになれば，将来の展望も開けるでしょう。

細谷　Aslib なんか Classification Group というのがあってね，その研究の水準というものは全然ちがうんですよね。委報の分類をどうしようかなあという具合でなく，分類理論とは何か，自然科学の成果からいろいろ吸収して，それは分類学，論理学なんですね。そのような基礎の上に実証研究がのっているんです。

杉本　大きくいえば分類は科学論の一部分でしょう。

細谷　フランシス・ベーコン以来の伝統があって，高度な分類学問論と現場の実験との結合なんですね。ほんとにああいうのはすばらしいんですね。これは主題には一応かかわらないです。それから Aslib でやっていることはね，Warwick 大学のライブラリアンのフレッチァーだったかな，大学，研究所の非市販資料の研究をやったりしてますね。

杉本　Warwick Univ. というのは戦後できた new university ですね。ああいう新しい大学の動きをよく調べる必要がある。

細谷　イギリスの場合ね，Regional Library System が最も発達した国ですね。伝統の上に立っているんです。増田四郎さんではないけれども，市民精神の伝統という根があってその上に Regional Library System が発達しているんです。例えばシェフィールドにあるシェフィールド大学図書館の他にシェフィールド市立図書館が

あって，これがしっかりしているんですね。それでネットワークを組んで，ロンドンのセントラル・ライブラリー・システムに組みこまれているんです。ネットワークがきちっとしていて，ファクシミルでどんどんコピーをやっていますね。あるということがわかれば，いながらにしてコピーがすーとでてくるんですね。そういうシステムが非常に発達しているんです。これはね，20年や30年で日本が追いつくかどうかわかりません。

経済資料ハンドブックの意味

細谷　やはり Aslib 式に，経済資料協議会も Speicial librarian，大塚流に言えば special bookman のようなものを育てていくにはどうしたらよいか。僕が文献季報に一番最初に賛成した主旨はあれによって special librarian を training していく意味を強く主張したんです。ある意味ではなったと思んです。だけどここに来て転換期にあるということで，もう一つの training するツールがいるんではないかと。それで，僕はハンドブックがそのツールだと思ったんですよ。僕は大塚さんから受けたノウ・ハウをハンドブックの参加者に手とり足とりして，及ばずながら教えていく。杉本先生も恐らく同じだと思います。一世代が持っているノウ・ハウを出来るかぎり，横文字の読み方から若い世代に伝えようと，僕らはそういう気持でハンドブックをやろうと思っています。ハンドブックが全部の解決になるかどうかは考えていませんが，突波口として何か議論していかなければならないだろうと。たまたま経済資料ハンドブックを協議会でやろうということになったら，全力あげてやろうと考えています。やはりライブラリアンというものは職人芸ですからね。ライブラリアンシップはやはりアーツですね。イギリス流にいうアーツですね。文献季報というものは，僕らが当初思ったほどになかなかそういうことができにくいですね。ここまで established されてしまったら。

細川　4，5回文献季報の編集センターをやりましたが，先生が言われましたように，慣れがでてきてだんだんズボラになってきますね。

細谷　機械的にできてしまうんですね。

渋田　先ほど分類論の話がでましたが，理論化していくという問題についてはどうですか。

細谷　それはやったらいいでしようね。日本の図書館学で一番欠けているものと思います。

杉本　日本の大学はまだまだ伝統的な講座体系が支配的ですから新しい総合科学というものはこれからというところでしよう。

細谷　それをやるにはどうしたらよいかと，これからみんなで考えていかなければいけないでしようね。応えてくれる人がいるかどうか，いないということはないでし

ようね。

杉本　日本のライブラリアンは，外国の図書館学関係の雑誌に毎号目をとおしているんですか。

細谷　いないんですね。

杉本　一応大学で雑誌をとっているでしょう。

細谷　例えば，Information Storage and Retrieval を呼んでいる人はいないですね。オランダから出ている International Social Science Journal を講読している人もいないでしょう。

杉本　図書館情報大学ではもちろんそういう雑誌は全部受入しているでしょうね。

細谷　あるんだけれど，余り使われていないようです。

杉本　相対的に人文社会系はおくれていて，自然科学のライブラリアンの方が進んでいますね。情報を早くつかむ必要が原動力となっているのでしょうか。

細谷　経済資料ハンドブックのレファレンスブックというものは僕なんかでもやれるのですが，論理面のおくれといったことはこれからどうしたらよいか。これをライブラリアンの世界でどう追いついていくかということが一番問題です。

細川　季報の欧文関係の編集をやっていて絶えず感じとることは，外国の経済目録の分類と今の季報の分類体系とを何とかかみあわせようと，矛盾を感じながらやっているんですが，これについても自分も勉強するけど，教えて欲しいと思うこともあります。

細谷　それをやるにはやっぱり分類の理論的な研究をやらなければならないんでしょうね。さて，最後に世代論に移りましょうか。

世代論について

細谷　経済資料協議会の場合ね，杉本先生や私や，前田さんらは第1世代で，この辺（細川，宮地）が第2世代で，第3世代ができてきている。それでは日本の書誌学ということからみたら，私らは第2世代ですね。やはり，その前が天野さん，内藤赳夫さん，関東では弥吉光長さんなどの方ですね。それでもう一つ前の世代というと内田魯庵から始まります。社会科学ですが内藤さんに来て始めて社会科学 Bibliographer の第1世代になると思いますが，杉本先生いかがでしょうか。

杉本　社会科学はそういうことでしょうね。和田万吉とかああいう方面の方もいるでしょう。

細谷　国文学ですね。国文学だと川瀬一馬とか，漢籍だと長沢規矩也さんとかいますが，人文科学だと内田さんだと思います。私は大塚先生から学んだのですが，この先生が第1世代の社会科学書誌学者だと思います。その大塚先生がすいせんしたライブラリアンは内藤さんでしたね。そういう世代の継承をどうやっていったらいいのかと。

渋田　最後になりましたが，いろいろな機会をとらえて，このような形のお話しとか，講演とかを経済資料協議会でどしどしやって欲しいですね。

杉本　いろんな話を記録して，とっておく必要がありますね。

渋田　細川さんとも前に話しをしたんですが，年計画で月に１回ぐらいでいいですから何とか書誌講座を企画してみたらどうか。それこそ１世代，２世代の人たちを動員してお話を聞き，勉強していく。経済資料協議会だけではなく，もっと多くの大学図書館の方を対象にしてもよい。

細谷　私が社会科学古典センターでやった古典資料の講習会の主旨はそれなんです。あれは毎年やるように計画されたものです。あれは社会科学書誌学を将来目指しています。書誌学をやらなければ古典の目録作成や研究はできませんという主旨です。あれはあれで参加してもらってもよい。あなたの言われたようなやり方でもっと体系的な勉強の講座でもよい。

渋田　経済資料協議会の主催でもいいし，それも一年だけに終るのではなく，継続して，第１世代，第２世代から積極的にノウ・ハウを聞き出していく。

細谷　これは前からやってもいいと考えていたが，なかなか言い出す機会がなかった。スタッフもそろっていることだしやればいいでしょうね。

細川　それでは，時間もありませんので一応ここで終らせたいと思います。長時間どうもありがとうございました。

杉本俊朗先生略歴および著作目録

略　歴

大正２（1913）年10月１日	神戸市に生まれる
大正15（1926）年４月	武蔵高等学校尋常科入学
昭和６（1931）年４月	武蔵高等学校高等科文科乙類入学
昭和９（1934）年４月	東京帝国大学経済学部入学
昭和12（1937）年３月	同上卒業
昭和12（1937）年４月	東洋経済新報社編集局勤務
昭和15（1940）年11月	日本経済聯盟会対外事務局独逸経済研究部研究員
昭和16（1941）年６月	同会改組により財団法人世界経済調査会となる，同研究員
昭和23（1948）年５月	東京大学経済学部研究室内社会科学辞典編集委員会編集主任